

令和4年12月1日



根本正顕彰会 会報

第100号

発行者 根本正顕彰会

「踏まれても根強く忍べ路芝のやがて花咲く春とこそ待て」

目 次

1 卷頭書 「『会報』100号の発行に当たって」	会長 山田正巳	1 頁
2 会報100号記念寄稿文		
(1) ご挨拶 那珂市長 先崎 光 様		2 頁
(2) 顧問から 加藤純二 様 海野徹 様 會澤義雄 様 小林茂雄 様 増子輝雄 様		3 頁
(3) 会員・元会員の声 (上記以外の会員等、敬称略・順不同) 横地富子 根本正治 仲田昭一 高畠精一 川上清 細貝幸雄 海老根敬 小堀優		8 頁
3 市社会科教育研究部夏季研修会「根本正の生き方に学ぶ」	事務局長 仲田昭一	19 頁
4 根本正顕彰フェスティバル 学び続けた青春・文教地区「清水原」 顧問(前会長) 増子輝雄氏 五台村の尊皇事蹟3題 事務局長 仲田昭一		22 頁
5 根本正顕彰会「ゆかりの地を訪ねる旅」 偕楽園(陰陽の妙・好文亭・「偕楽園記」・南崖の碑等) 理事 小堀優		38 頁
6 犯風会・禁酒同盟共催講演会に参加して 未成年者飲酒禁止法成立100年記念	会長 山田正巳	47 頁
7 根本正顕彰会のホームページとYouTubeのご紹介		48 頁
○ 編集後記	副会長横地富子	49 頁

お知らせ

公開講座

日 時 2月19日(日)

会 場 那珂市中央公民館 講座室

テ マ 「アメリカ研修視察を振り返って」

講 師 本会 元副会長 高畠精一氏

○ 会報100号記念への玉稿御礼と今後の会報への原稿募集

ご多用の中、会報(100号記念)への玉稿をありがとうございました。

今後も、隨時、原稿を募集します。テーマは自由です。ふるってご投稿下さい。

『会報』100号の発行に当たって

根本正顕彰会 会長 山田正巳

平成10年5月1日に根本正顕彰会会報第1号が産声を上げ、この度、記念すべき100号が発行されることは大変喜ばしく感じております。このように会員の皆さまの許へ情報共有の手段としてお届けできましたのも偏に会員の皆さま方のご支援ご協力の賜物と深謝申し上げます。また、歴代の会長や役員特に事務局長の崇高な奉仕の精神(手弁当で選挙を戦った根本正の精神)に対しても謝恩申し上げます。

平成7年、仙台市の医師 加藤純二先生から著書「根本正伝—未成年者飲酒禁止法を作った人」が那珂町(現在は那珂市)寄贈されました。翌年、町民によるまちづくりを目指す「なかなか塾」が誕生。同年11月著書に啓発された塾生らにより「根本正調査・顕彰委員会」が設置され、平成9年10月「根本正顕彰会」が正式に発足しました。加藤先生からは地元の人々の「根本正」に関する思い出話や地元から見た人物像を収集し那珂版「根本正伝」を制作してほしいとのメッセージを受け平成20年に「不屈の政治家 根本正伝」が10年の長い年月を経て顕彰会から発刊されました。その間、平成13年10月6日(土)には「根本正生誕150周年記念事業」を実施し、名誉会長 橋本昌氏(前茨城県知事)会長 小宅近昭氏(元那珂市長)副会長 柏村一郎(元根本正顕彰会会長)を役員とし、参加者572名の多くを数え那珂市中央公民館において盛大に挙行されましたことは今でも私の脳裏に爽やかに映し出されます。なお、同時に会場であった那珂市中央公民館前のーの関親水公園畔にはその生涯と業績を称え顕彰碑「微光」が建立され、今では多くの市民の目に触れております。

このように歴代会長をはじめ役員のご尽力により発足当時の道標に従い順調な歩みを進めているところです。なお、「那珂市学校教育基本方針2022」の中では「根本正の生き方」(ふまれても根強く忍べ路芝のやがて花咲く春をこそまで)と「なかっこ宣言」の2つの基本理念を掲げ、強い意志と豊かな感性で、社会的自立に向け、たくましく生き抜く児童生徒の育成を図っていることは、顕彰会の今までの地道な歩みの成果と顕彰会会員ともども喜びたいと思います。

このように第二、第三の根本正を輩出しようと市と顕彰会は、車の両輪として地に足をしっかりと着け一步一歩前に進んでおりすることを御報告申し上げます。

また、顕彰会のホームページを日々更新しており、会報も1号から99号まで掲載しておりますのでアクセスしてみてください。

最後に正翁の歌から一つ幼年期に忍耐力を培った句を掲げて記念号のごあいさつに代えさせていただきます。

「夏の日に 田草とる苦を 思いなば やすき勤めの 吾身をぞ恥ず」

可愛い子には旅をさせよ

先崎 光

どんな人にも長所も短所もあります。完璧な人はいないと思います。また、子どもに限らず人を育てる上でほめて伸ばすというのはよく聞く言葉です。

根本正も一人の人間。当然、負と思われるところもあったでしょうが、その偉大な功績にスポットを当て次の世に活かしていこうという会の趣旨に賛同して私は入会しています。

私は以前水戸にある企画会社に勤務しており、現山田会長さんの依頼を受け生誕 150 周年式典に使われる根本正の巨大タペストリーを作りました。

合併前にも那珂町で顕彰活動が行われていたことは何となく耳にしていましたが、本格的に関わったのは入会後でした。

先輩方に混じり数多くの座学や足跡をたどる研修、後援会等に参加し衆議院議員として、未成年者喫煙・飲酒禁止法、国民教育授業料全廃、水郡線鉄道建設など多くの国家的課題や地域の振興に取り組んだ偉大な政治家であったことを知りました。

今との時代は違っても国会という立法府の中で戦い、政策として決定していくためには多數を取ることに変わりはありません。そのためには、時局を見据えて進めることの正しさ（先見性）、勝ち取るための戦略（知力）、やり抜く決意と行動（実践力）が求められ、不屈の精神がそれを支えたのであります。

何が根本正の不屈の精神を育てたのでしょうか。

皆様はすでにご存知、苦学の経験がそしてキリスト教の博愛の精神が大きく生かされていると思います。

「可愛い子には旅をさせよ」という言葉があります。根本正の人生を知るたびに、そして思いを後世につなぐとしたら私たちは自らを律するとともに、次の世代にも様々な体験（苦労では言い過ぎでしょうか？）をさせる役割があります。

子ども向けの副読本刊行は真に目的を射ており更なる活用を。過保護・過干渉をつつしみ、好奇心・探求心を育てる努力を惜しんではありません。

私も今を生きる一政治家としてそのことを強く思い、実践に務めてまいります。



加藤純二

祝会報百号一疑問を解く旅は続く

昨日の令和4年11月16日水曜日、東京大久保の矯風会館で顕彰会の山田正巳会長さん、根本正治さん、高畠精一さんら三人とお会いしました。その日には日本禁酒同盟とキリスト教婦人矯風会と根本正顕彰会による「子どもにお酒を飲ませないー100年前にそれを法律にした日本人」と題して、根本正先生が未成年者飲酒禁止法案の成立にかけた努力についてお話をさせていただきました。今年がこの法律施行から百年にあたり、施た行は4月1日でしたが、新型コロナ感染症の流行のため、この日に延期されていたのでした。

私が根本正伝を出版したのは平成7年でした。まだまだ未解明な部分が多くあったのですが、いまでも調査の連続では出版ができなくなると思い、踏み切りました。幸いですが、那珂町の方々が顕彰会を結成し、地元に残る先生の足跡などを徹底的に調査し、それを会報や出版物にされてきました。特に先生が最後の総選挙で落選した時、「憲政ほろぶ」と叫んで割腹自殺を図った「傘屋・清水」のご子孫を突き止めた時、驚きました。ともかく会報は百号となり、心からお祝い申し上げます。根本報告には、驚きました。ともかく会報は百号となり、心からお祝い申し上げます。根本正先生の努力と業績が多くの人々に知られ、特に地元の子ども達に关心を持ってもらいたいという活動には「やはり地元の方々の熱意は違う」と感心していました。

一方、私の方は未解明な部分について、自分なりに調査を続けてきました。特に教科書疑獄事件における教科書国定化に帝国議会でただ1人反対した代議士として、この事件について調べました。この事件は明治時代が文明開化から軍国主義化へと変容していくターニングポイントとして重要な事件だと思いますが、詳細は私のHPに掲載しています。

青年期の先生をオークランド市のバラストー弁護士に紹介状を書いてくれたファーという外国人。先生は蒐集した浮世絵を関東大震災の復興のため、すべてを売り払ってそのお金を寄附したのですが、誰に売って、どこに寄附したのか。幼少の次男正次さんが死去したこと。徳子夫人が購入した印刷機は日本禁酒同盟の機関誌『國の光』が印刷に使ったのではないか。この雑誌の挿絵を安藤文子さんが描いていたのではないか。家僕として仕えた豊田天功の息子で小太郎という人は京都で暗殺されたのですが、その墓地を京都の本圓寺に探して歩いたのですが、見つからず。などなど、疑問点が次々と浮かびます。もし先生ご夫妻が生きておられたら、「そんなこと、もう詐索しなくてよい」と言われるかもしれません。数年前には藤田東湖が幽閉されていた「小梅村の水戸藩下屋敷」を訪ねてきました。建物はなく、大名の屋敷らしい庭園は当時のままに残っていました。藤田東湖は水戸学の体現者として根本正先生に大きな影響を与えた人物です。こんなことを書いていると字数が増えて、会報の発行にご迷惑になるでしょうからこの辺にしておきます。顕彰会の方々の会報発行以外の多彩な活動にも敬意を捧げます。(仙台市宮城野区 宮千代加藤内科医院 加藤純二)

根本正先生との出会いと顕彰会設立の思い出

海野 徹

私が根本正先生のお名前やその功績について知ったのは、恥ずかしながら平成8年、当時47歳の時です。

母が昵懇にさせていただいていた根本静江先生（根本先生の分家筋で那珂市ふるさと大使の根本直さんご母堂、故人）から頂いた『根本正伝』という著書を拝読したのがきっかけでした。

著者は御承知のように仙台の内科医院院長の加藤純二先生（那珂市ふるさと大使）で、アルコール依存症関係の禁止運動に関する論文を作成中、根本正という人物に遭遇しその人物性やひたむきに努力を重ねる姿勢と国民の福利向上・青少年の健全育成に渾身に取り組む姿に感動し（未成年者飲酒禁止法を作った人『根本正伝』）を上梓するに至ったことを後日お聞きしました。

当時私は、那珂町役場が主導する地域活性化や地域興しを目的とする『なかなか塾』に参加しており、事業の一環として根本先生について調査をして行こうと後藤啓文さんを責任者として、高畠精一さん（なかなか塾塾長）と私が仲間に入りました。

顕彰会を立ち上げるにはどのように手続きを進めればよいか、仲田昭一先生（後に茨城県立日立第二高校校長、那珂市歴史民俗資料館館長）のご自宅を三人で訪問し懇切丁寧なご指導をいただきました。

又、先進事例を参考にしようと高萩市の『長久保赤水顕彰会』を訪ね、当時の大崎宥一会長や生涯学習課長の佐川春久さん（後に総務部長、現在顕彰会会长）の職場や大能のご自宅をお尋ねし沢山のことをご教示いただきました。

高萩市には根本先生の幼少時代の神社の塾の先生であった佐川伊予之介の顕彰碑（佐川愛廣先生の碑の撰文が根本先生）が高萩高校へ至る中段にある事や、佐川伊予之介が佐川春久さんの分家筋に当たる事、又、墓地が同じであることなど偶然の発見に驚いた記憶があります。

その後複数回にわたり高萩に足を運び、会則や会費、運営の方法について教えを賜りました。現在の根本正顕彰会の会則、会費は長久保赤水顕彰会を参考にほぼ同じに策定したものです。顕彰会の設立総会が平成9年に開催され初代会長には柏村一郎さん（故人）が就任されました。

柏村さんの根本先生に対しての思い入れは大変強く、用意されていた論文は格調高くかつ長文のものでした。

柏村会長をはじめ役員・会員ともに熱心に活動を展開していく事なりました。国立国会図書館や、外交史料館、国立公文書館など、あるいは根本先生のお孫さんである根本正廣さんのご自宅を資料収集のために私の車で案内したことを懐かしく思い出します。

海後宗文さん（桜田門外の変、烈士海後磋商之介の本家筋で三島神社宮司、故人）は何とか顕彰事業を盛り上げようと、根本先生の生家（根本正治さん宅）に『根本正先生生誕之地』を海後さんの自費で建立しました。

海野さん花火を打ち上げようや、と言う言葉は今も忘れません。

根本正顕彰会の歴史を振り返って

會 澤 義 雄

顕彰会は歴史的には、加藤順二先生が発刊した「未成年者飲酒禁止法を作った人・根本正伝」が発刊され、その影響で平成8年（1996）なかなか塾に根本正調査・顕彰委員会が設けられたのに始まる。翌年設立総会が開催され、10年2月には臨時総会（参加者70名余）が開催され役員選出があり、柏村一郎氏が会長になる。熱氣むんむんの総会であった。この時加藤先生（仙台・内科医）を講師に迎え「未成年者飲酒禁止法を成立させた根本正代議士ーかくも長い間戦った原動力とは？」の貴重なご講演を頂いた。

10月には柏村会長が茨城放送で「根本正と顕彰会について」というテーマで「芸文いばらき探訪」で取り上げられ、顕彰会の活動は次第に盛り上がってきた。

同月には海後宗文氏のご助力により、根本喜代寿氏宅の前庭に「根本正先生生誕地碑」が建立され除幕式が行われた。

顕彰会の今後の充実・発展に備え「行事広報委員会、調査研究委員会、資料史跡保存管理委員会」を設けた。さらに町の国際交流協会に加盟し国際的視野の交流拡大を図った。

会員の方々も熱心に取り組み研究例会は毎月開かれ、会報も毎月発刊されるようになった。

研究例会ばかりでなく現地研修会も行われ、国会議事堂・安藤記念教会・根本正の墓地のある青山霊園、小石川後楽園をバスで訪ねている。11年4月には初めて根本正ゆかりのアメリカの実地研修も実施している。この時は根本正が学んだバーモント大学や根本正に学費を提供して援助してくれたビリング家の墓参やバンカーヒル（ボストン）の見学をしている（参加者14名）。

学校教育の場でも次第に注目されるようになり、横堀小学校の根本正の研究作品を那珂郡教育研究会で発表している。また五台小・横堀小・菅谷小・木崎小学校で根本正についての児童の研究作品を那珂中央公民館の2階ロビーで展示している。

またNHK「中学生日記」、「なんで二十歳（テーマ）」で未成年者喫煙禁止法との関係で根本正が取り上げられている（12・12・12）はとてもうれしかった。

資料収集のため柏村会長と小生で東京都武蔵野市にある日本禁酒同盟事務所（古塩氏宅）を訪ね貴重な資料を長時間にわたりコピーさせていただいたのが懐かしい。また遠藤副会長と小生で外務省外交資料館を訪ね「移民地探検報告」をコピーさせていただき膨大な資料を収集した。これは現在、製本し那珂市立図書館の書架に陳列されている。国の移民政策を遂行するための調査を依頼され、鰐のいる河を命がけで渡るなど言語を絶するような苦労を重ねての調査報告なので、根本正の不撓不屈の精神が読み取れる。生誕150周年記念事業は橋本県知事、小宅近昭町長を始め多数のご来賓を迎え盛大に挙行されたのは記憶に新しい。この時歴史の大家である佐藤次男氏からは講演をいただいたり、パネリストとして、加藤順二先生などと共にお話をいただいた。さらに根本正の偉大な業績を残すため、「根本正の生涯ーその精神と業績」、「根本正生誕150周年記念誌」、「根本正物語（マンガ本）」の出版や「根本正の生涯（ビデオ制作・黒羽文男）」など会員の方々の努力により作成された。そして根本正の集大成として『不屈の政治家ー根本正伝ー今こそ生きる人間を大切にする心』が刊行された。これは増刷になり好評を博したものと思われる。

「根本正顕彰会」入会動機と活動を振り返って

小林 茂雄

私は、「根本正顕彰会」に平成17年12月5日に入会しました。当時、私は当那珂市、水戸市、常陸太田市、ひたちなか市、常陸大宮市等の生涯学習講座や講演会、研修会等に積極的に参加しており、結構忙しい毎日を送っていましたが、「根本正顕彰会」に深い関心を持っており入会したいと考えていたところ、今は亡き当時顕彰会副会長の遠藤氏より、熱心な勧めがあり、入会した次第です。(亡)遠藤氏とは、勤務先(常陽銀行)が同じであり、経営相談業務(遠藤氏は本部、私は母店)を5年間担当していた関係で情報交換、交流等があり、共に顧客から工場、商店経営、財務診断等の相談や講演、研修等を行っていました。

平成17年12月5日に会員になって3年後の平成20年7月に理事になり、平成28年5月に会長となり、1期3年後、平成31年5月、健康上の理由により、会長を退任しました。

私は、子供の頃から教師(高校教師)になるのが目標でした。サラリーマン時代5年と短い期間でしたが経営相談業務を担当し、猛烈に勉強した(自分の感覚)ことが顕彰会活動に生かせたかと思います。

根本正顕彰会の年間基本活動について、振り返ってみると、各役員共、主たる担当は決まっていますが、全員協力体制で遂行しており、よくまとまって活動していると思います。役員間のコミュニケーション、協力がなければ会の活動遂行は困難だと思います。当然ながら、会員の皆様方の協力にも感謝しております。

根本正顕彰会の年間基本活動について、(現在)

(活動回数、内容について、永年の間には少々変化がありますが、現在で記載)

公開講演会(年1回)ー外部講師依頼・会場予約・当日の会場設営・資料印刷(印刷日時を決め、役員4~5名で印刷)

公開講座(年1回)ー 内部講師(会長、副会長持ち回り担当)ー会場予約・当日の会場設営
担当講師は、講演用テーマ選定・調査、原稿作成(相当の時間がかかる)
講座用資料印刷(公開講演会資料印刷と同じ)

顕彰フェスティバル(年1回)ー会場選定、フェスティバル内容決定・地区役員と折衝、打合せ・当日会場設営・配布資料ある場合、印刷

公民館まつり(年1回)ー公民館側と打合せ・会場展示設営・まつり期間中展示場当番

ゆかりの地を訪ねる旅(年1回)ー行先選定、下見・訪ねる旅先の調査、資料作成・印刷・
車内や現地での説明担当者選定(担当者が説明)・バス会社
の選定、バス会社担当者との折衝(値段、コース打合せ等)
一日コースの場合ー昼食会場選定、料金等打合せ等

会報発行(年2回)ー会報内容、テーマ等検討・原稿作成依頼・印刷・発送

以上、根本正顕彰会の活動を振り返ってきましたが、何といっても最大の行事は「根本正生誕150周年記念事業と式典」(平成13年10月6日実施)ではなかったかと思います。当時、私は会員ではなく、行事などに参加していませんでしたが、行事や諸記念誌、案内書発行等に携われました諸先生方や皆様方のご苦労は大変だったと思います。これからも、根本正顕彰会の益々のご発展と会員の皆様方のご健康とご多幸を心からお祈り申しあげます。

生誕地「那珂市東木倉」

今に伝わる根本 正の精神

根本 正顕彰会

顧問 増子輝雄

このたび、根本 正顕彰会「会報」が発刊以来100号の節目を迎える運びとなり、記念号として年内発刊で準備が進められております。まことに喜ばしく心からお祝いを申し上げます。100号までに至る間、関係された方々のご労苦に対し感謝と敬意を表したいと思います。

さて、根本 正は少年時代より自ら学ぶことへの執念を發揮し、幼少時から神主の塾に学び、その後もっと上をめざして勉強したいと水戸に出て学び、さらに20歳のとき東京に出て働きながら学んだ。さらに米国に渡り小学校、中学校、大学まで10年間海外で学ぶなどしっかりと基礎を築き上げ、明治31年から大正13年までの26年間政治家（衆議院議員）として活躍して来ました。中でも重要事項として教育の大切さを取上げ、青少年の健全育成等を含めて実現に奮闘してきたところであります。

一方、昭和の時代に入ってから根本 正の生誕地である、「那珂市東木倉」地区内の五台小学校（明治22年創立）を中心とした周辺に教育施設が次々と建設され、（大学、高校（2校）、幼稚園、社会教育施設等）県下でも有数の文教地区としてその存在を示しております。

これだけ多くの施設が1箇所に集中していることは、都市部以外では大変珍しく注目されているところであります。

また、通学の足となる交通機関については、根本 正が敷設に大きく関わった「水郡線」を利用する生徒も多くおり、朝夕の水郡線后台駅の乗降時間帯は大変賑わい活気に満ち溢れた時間帯となっております。

根本 正が歩んだ自らの学ぶこと、そして政治家として国民教育授業料の全廃を始め小学校国庫補助法案の提出、未成年者喫煙禁止法案、未成年者飲酒禁止法案など歴史に残る法案を次々と提出し成立させて来た現実を見ると、この生誕の地に根本正の精神が今に導かれているように思えてなりません。

この現実は地元住民にとっては大変光栄であり、また誇りに感じているところであります。

「那珂市東木倉」地区内には歴史のある清水寺と「清水洞の上公園」があります。公園は近年地元住民の方々の組織的、献身的な協力などにより整備されてきており、訪れる人も多く人気が高まっています。

このような恵まれた環境の中で文教地区として、今後さらに大きく発展していくことを願いたいと思います。

会報 100 号発行を迎えて

根本正顕彰会発足以来、今年で 25 年、会報の発行を続けてついに 100 号を迎えました。これも皆様のご支援を頂いた賜物です。

初期の会報をめくると、根本正について多くのことを伝えたい、根本正が生きた当時の社会情勢を伝えたいと熱意と情熱があふれています。先輩方の研究の広さ奥深さに尊敬の念を抱きます。会報 100 号発刊までの間には、生誕 150 周年記念事業や研究の成果として根本正伝も発刊できました。

根本正はパリ万博土産のマッチと時計に驚き、これからは横文字（西洋文明）の時代だと考え、そこから自分は将来何をすべきかを見極め、アメリカ留学を目標に定めます。そのための努力を惜しまず実行しました。この行動力に驚きます。「一念岩をも通す」です。

今年は鉄道開業 150 年の年です。維新後わずか 5 年で西洋文明の象徴ともいえる鉄道を敷設し開業させ先進国の背を追う明治政府の強い意気込みを感じます。根本正は明治 5 年 10 月 14 日の新橋の停車場で行われた開業式を見学にわざわざ出かけています。西洋文明の大きさを感じ、ますます横文字の必要性を感じ、未来に向かう自身を励ましたことでしょう。

今世界は、先進国の少子化・気候変動・きな臭い世界・国連の機能不全・エネルギー・食糧問題・経済の問題など世界各国が複雑に絡みあい不安なことばかりです。歴史は繰り返す。明治の政治家や根本正ならどのような解決策を考えるでしょうか。

当会は、新規会員が少ないなど会員の減少に頭を痛めているところです。これからも根本正の生き方を伝え続け、魅力ある会のあり方を会員の皆様とともに考えなければなりません。

ご意見やご提案等いただければ幸いと存じます。

横地富子

顕彰会活動の中での思い出

根本 正治

顕彰会会報100号を記念して、私が顕彰会活動の中で一番の思い出を会員の皆様へご紹介したいと思います。それは1999年4月10日から4月18日までの8泊9日のゆかりの地を訪ねる旅海外編「アメリカ研修視察」です。私は43歳で現役バリバリの時でした。日本からは、初代会長の柏村一郎氏を始め、合計11名が参加しました。「アメリカ研修視察」の詳細は、来年の2月に行われる公開講座で元副会長の高畠精一氏が発表していただけすることになっています。私の紹介で興味を持ちましたら是非公開講座を聴講下さい。ここでは、思い出写真の掲載とその説明とさせていただきます。



①

②レセプション（左から丸山和昭氏、久子ビリング氏、ビリング氏、丸山初代氏）



②

③マーシュ・ビリングス・ロックフェラー国立歴史公園
(ビリング氏と参加者全員で)



③

④バーモント大学 根本正が送ったフレデリックビリン



④

グ胸像の前で。(根本篤夫妻(前列最左と上)、常陸太田市出身で筑波大からバーモント大学へ研究に来ている富岡真一郎氏(前列左

2人目) ⑤現在の富岡真一郎氏、水戸赤十字病院呼吸器専門医



⑤

根本正顕彰会では、ホームページや YouTube で紹介しています。アメリカ研修視察(約2時間)も YouTube で紹介しています。

最近 YouTube に「根本正の研究・発表(五台小学校6年生)」「不屈の政治家・根本正～教育立国の恩人～」「根本正の生涯～青少年健全育成の父～」をアップしました。是非ご覧ください。

根本正顕彰会の役割

「ふるさと」は自分の生まれた所に限らない。世界の中の日本からはじまり、県や市町村に至る視野で考えなければならない。これは世界中の民族および国家国民すべてが懐くものでなければならない。これを前提として、老若男女すべからくそれぞれの人生の中で「わが故郷を誇りに思う心」を養いたいものである。

天下國家の行く末に心を致しつつも、身近な郷土の誇りとする人物の一人として「不屈の政治家根本正」を挙げておきたい。早くは、岩上一郎知事時代の昭和46年に、青少年育成茨城県民会議が、茨城の100年を記念して『郷土史にかがやく人びと』を発刊した。その中で、「人間のための政治をつらぬいた根本正」が紹介されている。その時の、那珂町及び周辺での反応はいかがであったのか、話題になった話を寡聞にして記憶にない。

その後、宮城県の医師加藤純二氏の著書「根本正伝」が平成7年に発行され、それのPRにより根本正が話題となった。やはり時と場所と意識の問題であろうか、「灯台下暗し」である。他から教えられることの典型であった。しかし、この『根本正伝』に触発され、新鮮な感動を以て「根本正に学ぼう」と立ち上がった当時の青壮年の心意気は素晴らしいものである。「感動から実践へ」と進み根本正顕彰会の結成に達した姿は、あたかも根本正がマッチと時計に感動して行動を起こしていった姿とダブるものがある。

現在、根本正顕彰会は結成20年を経てなお地道な活動を続けているが、一時の盛り上がりからは後退していることは否めない。会員の高齢化も進み、入会して活動したいと思う者も少ない。この現象は多くの分野に見られることであり、「創設よりも継承・継続が難しい」とされてきた金言そのものの姿である。

しかし、現状ではまだまだ根本正は知られていない。根本正が関係してきた団体、地元はもちろん周辺地域の青少年健全育成会議や水郡線関係者、高層気象観測関係者の中でもほとんど話題とならない。なっても広がらない。

そのような状況の中で、救われること、また偉大なる発展が期待されることとは、地元那珂市の教育方針の根幹に「根本正先生の生き方に学ぶ」ことが据えられたことである。根本正の生き方を現在や将来に向けてどのように生かすことが出来るかを、広く大きな視点で学ぶことを目的としている。那珂市内のすべての子どもたちは、「根本正」を記憶することであろうし、それはまた必ずや将来に生きて来るもの信じている。根本正が重要視した「教育の力」への期待である。時を得て、日本の在り方に心を傾ける姿勢をともどもに育てていきたいものである。

顕彰会の存続が難しくなった場合は、代わって公機関がその役割を担うべきである。担当者は心して根本正に学ぶ機会を設け、市民に発信し続ける使命感を持つことである。

多くの顕彰会は、一時の勢いを以て躍進し、記念行事を以て衰勢に向かうことを例とする。強弱は問わず、常に発信し続けることが重要である。それができるかどうかが、現在問われている。

仲田昭一

思うままに

元副会長 高畠精一

まずは会報第100号の発行をを迎えましておめでとうございます。

一口に100号と申しましても、これはもう大変なものでございます。平成10年（1998年）10月8日発会以来、今まで24年間発行回数を積み重ねてきた結晶であります。

先日、那珂市立図書館にて過去に発行された会報をざっと通読いたしまして、改めて根本正顕彰会の存在価値の重みと歴史を実感いたしました。

振り返ってみると、平成10年（1998年）10月8日の根本正顕彰会（初代会長は柏村一郎氏）設立、平成11年（1999年）4月10日～18日までの米国バーモント州ウッドストックの訪問、平成13年（2001年）10月6日の根本正生誕150周年記念事業、平成17年（2005年）6月2日のブラジル茨城県人会との交流などは必然的に行われてきたような気がいたします。そこには超自然的、神秘的、神がかり的なものがあったと感じとっております。平成13年10月6日の根本正生誕150周年記念事業を軸として物事が進み現在に至っているように思います。根本正顕彰会を立ち上げたこと、これが大きなウェイトを占めかつ意義深いものであったと思っております。

この根本正顕彰会は仙台市の医師である加藤純二氏の著書『根本正伝』（平成7年11月1日発行）を拠り所として、なかなか塾（平成8年8月3日発足 初代塾長 高畠精一）の根本正調査研究委員会から分離独立したものであります。私も含め副塾長の海野 徹氏（前那珂市長）、調査研究委員長の後藤啓文氏、この3人が中心となり発起人11名（なかなか塾生が大部分であった）によって、平成9年（1997年）4月 根本正顕彰会設立準備会を起こしたことが発端となっています。平成10年（1998年）3月8日の臨時総会を経て10月8日に発会しております。当初40数名の会員でスタートし各分野から造詣の深い方々が寄り添い、調査研究が行われ発表の場となりました。多い時で百数十名の会員の方々の支援・協力を得て、今日の根本正顕彰会の存在があります。

「根本正ゆかりの地を訪ねる」と称して「アメリカ研修視察」が15名の参加を持って平成11年（1999年）4月10日から4月18日まで実施されております。詳しくは会報9～10号に記載されておりますが、この研修視察の実現までの過程を思い出してみます。

マサチューセッツ州の州都であるボストン領事館の首席補佐官であった久子（旧姓は古館久子・盛岡市出身）・ビリングスが、昭和60年頃（1985年）に初めて、バーモント州ウッドストックのフランクリン2世・ビリングス宅を訪れます。その際、当家から根本正のことを知らされます。彼女は日本の国会図書館へ問い合わせ、根本正の生家で子孫である那珂市東木倉の根本喜代寿氏を突きとめます。

根本喜代寿氏との話の中で、愛娘の丸山初代氏（夫は和昭氏）がニュージャージー州におられるなどを知り、連絡を取り合って丸山夫妻が久子・ビリングス宅を訪問することになります。

一方、丸山和昭氏の日本への帰朝時（平成10年11月ごろ）に、当時、顕彰会副会長であった私が面会し、根本正について談義したなかで、「アメリカ研修視察・ウッドストックとバーモント大学の訪問」の構想が練り上がり、翌年4月にウッドストックへの訪問実現となった訳です。

これらの流れは単に偶然とはいまだに思われません。

もし、吉館久子氏がフランクリン2世・ビリングス家を訪問されなかつたら、会報9～10号に記載されたようなことは実現できなかつたと思います。

天国に召された根本正の導きがあつたのかもしれません。

平成17年(2005年)6月2日に根本正顕彰会主催のブラジル茨城県人会との初交流(詳細は会報36号、42号)が那珂市中央公民館にて行われましたが、これについても単に偶然的なものとは思われません。

平成13年(2001年)10月6日の根本正生誕150周年記念式典にブラジル茨城県人会会長のメッセージを川上 淳氏(昭和27年水戸一高卒・ブラジル国グアタパラ在住)が代読されましたことに始まります。(この当時は川上氏が私の高校先輩にあたることは知りませんでした。)

平成16年(2004年)5月15日付知道会会報(水戸一高OB向け会報)の「会員通信欄」へ「グアタパラの地から」を川上 淳氏が寄稿されました。これを読んだ私が川上氏へ連絡し交流のきっかけとなります。奇しくも、当時の茨城県国際交流課課長は私の高校同級生であつて、グアタパラの川上 淳氏と面識がありました。

平成17年(2005年)5月 茨城県国際交流課が、潮来市で開かれる第56回全国植樹祭にブラジル茨城県人会の5人(代表は川上 淳氏)を招待しました。

この機をとらえ、当時の遠藤和男副会長を中心となり、茨城県国際交流課、那珂市と連絡調整のうえ実現したものでありました。

話は逸れますが平成28年(2016年)6月4日 ブラジル茨城県人会より、県人会の創立55周年記念式典(7月31日開催)への招待状が私宛に届きました。(この年の7月にオリンピックのリオデジャネイロ大会が開催されています。)

私はこの式典に参加したかったのですが、5月に心臓の手術をしておりまして式典参加は断念せざるをえませんでした。参加しておれば二者の交流はさらに深まっていたかもしれません。

最後になりますが発会以来、柏村一郎会長を始め遠藤和男副会長など多くの方々が顕彰会に関与して参りましたが、既にお亡くなりになっている方々もいらっしゃいます。お亡くなりになつた方々のご冥福をお祈りいたします。

以上、思うままに記述して参りましたが、会報第100号の発行を迎えて心から祝うとともに、今後の顕彰会のますますの発展と絶え間ざる存続を切望するものです。

令和4年11月2日

川上清

（放鶴）

根本正先生を学ぶ喜び

根本正顕彰会会報が近々100号を迎えると聞いた。顕彰会としてすばらしい活動の取りあえずの決着である。おめでとうございます。私は60歳定年後の自由の身で、県地方史を学んだ。学習資料は、手に入り易く、中で長久保赤水先生と根本正先生にすぐありついた。私は水戸市住まいだったが根本正顕彰会に入会し、丁度活動の活発な時に席を置けた。平成13年には彫像入りの顕彰碑「微光」が建てられ、除幕式に参加できたのは幸いだった。一時幹事も担ったが、那珂市の方に受けてもらった。

根本正先生が何故偉かったか、それは幼少時から学問に熱心、水戸学を学び、陰日向ない性格がどこでも有用され、望んだ渡米が叶い、さらに欧州をも回って帰国し、政治家になつて衆議院議員を26年務めた。その中では人間の平等を説き、青少年教育には最も力を入れた。小学校の授業料廃止、未成年者喫煙禁止法、未成年者飲酒禁止法の制定に全力を尽くした。飲酒禁止法には何と21年余を費やしたが実現への強さも擁していた。水郡線建設、東海村村松の砂防林植栽など多くの事業を推進した。根本正先生は那珂市生まれ、このような偉人が茨城県人であることを喜び、学ぶことに誇りを持ち続けたいものである。

根本正顕彰会会報第100号に寄せて

細貝 幸雄

か い報の発行が100号に到達!! 誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げます。
い ち号は「根本正顕彰会」が発足した平成9年の翌年5月に発行されたと伺っております。
ほ ん当に素晴らしいです。以来24年、地道に発行を継続し、第100号到達です。
う まず拝見いたしました。役員の皆様や関係者各位の賜と感銘いたしております。
だ い100号発行を記念しての原稿募集…、何をどう綴ってよいのやら戸惑っております。
い つも数ページに及ぶ会報です。改めてこれまでにお送りいただいた会報や根本正生誕
ひやく50周年記念誌を繙いてみました。(記念誌は増子輝雄前会長様から頂戴しました)
く にの行く末を案じつつ、青少年の健全育成や近代日本の発展に生涯をかけた根本正先生。
ご 台地区(東木倉)出身の偉人です。近隣地区に居住する者として誇りに思っております。
う かれることなく高い向上心や自制心を持って、常に前進を期す姿勢には驚きを感じます。
と きに20歳、パリ万博土産の時計とマッチを見て衝撃を受ける。英語を学ぶ必要を痛感。
う みを渡って西洋文明に触れたい…。藩の役人を辞し上京。複数の学舎や塾で学び続ける。
た ん気は損氣、まさに「踏まれても根強く忍べ路芝のやがて花咲く春をこそ待て」の如く。
つ いに機会を得、28歳で渡米。バラスト一家に召し使いとして住み込み、一生懸命働く。
ま すます勉学に励む。無月謝で教育を受けられることに感謝し、仕事にも進んで取り組む。
こ どもたちと共にオークランド小学校やホプキンズ中学校で学ぶ。多くの支援者に恵まれ、
と くに富豪ビリングス氏の支援によりバーモント大学へ。優れた成績を修め38歳で卒業。
に 本に帰国する前にはイギリス・ドイツ・フランス・イタリアなどを訪ねて見聞を広める。
お 世話をなったビリングス氏が逝去の際は、氏の銅像と伝記をバーモント大学へ寄贈する。
め でたく39歳で徳子夫人と結婚。翌年には長男美倫(ビリングスにあやかり命名)誕生。
で 会いに恵まれ、板垣退助伯爵の勧誘を受けて政界入り、47歳で帝国議会議員に初当選。
とう 選6回、代議士生活26年。その間の挙げきれない程の業績には驚嘆するばかりです。
ご 台の先輩に誘われ、顕彰会に入会して7年。根本正先生の偉大さには圧倒されています。
ざ ん念に思うことは、入会するまで根本正先生の存在を意識せずに過ごしてきたことです。
い まからでも顕彰会での学びを生かし、よりよい生活を心がけていきたいと思っています。
ま さに未来を担う若者たちにこそ、根本正先生の存在を知らしめたいものです。そして…、
す こしでも若手会員が増え、山田正巳会長様のもと、顕彰会の末永い発展を願う次第です。

根本正に影響を与えた水戸学

海老根 敏

1 佐久良東雄（桜東雄） 1811～1860 50歳。従四位 尊王志士歌人

新治郡八郷生まれ、父飯島良哉（平蔵）、僧侶から還俗、神官大阪坐摩（いかすり）神社。
真壁善応寺住職17世、飯島家は常陸平国香、貞盛の後裔。「水戸の心を藤田東湖に学ぶ。」
桜田門外の変では高橋多一郎親子と相協力、安政の大獄、江戸の小伝馬町で獄死。

2 加藤桜老（おうろう） 1811～1884 74歳。幕末の志士碩学者（儒教、神道）

水戸藩士、佐藤政祥の子、水戸郊外浜田の生まれ。14歳笠間藩士加藤惣蔵の養子となる。
子供の頃森田桜園について儒学を学び、また武術を習った。元禄元年（1830）水戸会沢
正志斎の門人に入り、翌年東湖にも学び尊王思想となった。天保9年（1838）江戸に出
て林述齋の門人となり、又、平田篤胤に儒学、神道を学ぶ。安政3年（1856）笠間に1
て3山書桜という学問会所を建てた。万延元年（1860）長州藩士高杉晋作が桜老を訪ねて
いる。この年齊昭公死去水戸政情不安のため笠間に宿泊。

文久3年（1863）長州藩主毛利氏の招きに応じて長州に赴いた。途中京都で皇居を拝
んで漢詩を作る。萩の明倫館で学問を教えた。さらに慶応3年（1867）山口郊外に詠帰塾
を開き水戸学を教授した。門弟200余人であったという。

明治元年（1868）4月に入り明治政府に仕えた。後に長州・笠間両藩主からこれまで
の功績に対し賞を受け、新政府の軍務官御用掛、漢学所御用掛、そして安房神社や賀茂別雷
の神社などの神官を務め、77年に67歳で退官。晩年は東京小石川で師弟の教育に当たった。

3 西丸 帯刀（さいまるたてわき） 1822～1913

野口雨情の祖父、勝章の実弟磯原生まれ。大津港の西丸家に養子となる。（郷士）幕末長
州藩士木戸孝允（桂小五郎）と1860年成破の盟約を結ぶ。10代江戸に出て剣術を学ぶ。
その後水戸弘道館に学ぶ。弘化4年（1847）26歳大津村郷士西丸家の婿養子となった。義父
が手広く商いをしていた為全国の情報が集まった。東禅寺事件、坂下門外の変にも関わった。
元治元年（1864）水戸藩抗争は天狗党側自宅に潜伏。

維新後は水戸藩の北海道開拓に従事。廃藩置県により廃止後、全ての公職から退き大津で隠棲し92歳で没した。妻は島崎藤村の妹、長州の伊藤博文もたびたび大津村を訪問していたという。

常陸大宮市（旧山方町）（故人）根本嘉朗町長（根本酒造、久慈の山）の奥様、専務（故人）淳子さんは西丸家の4女鈴木家の娘、根本家に嫁ぐ。生前島崎藤村の話はよくきかされたと私に話していました。根本家は遠祖、藤原鎌足、秀郷、小野崎公通、盛通、（根本）の一族、地元の方からお大恩様と言われて尊敬されています。

○ 水戸学

水戸学は、江戸時代の日本の常陸国水戸藩において形成された学風、である。第2代水戸藩主徳川光圀によって始められた歴史書「大日本史」の編纂を通じて形成された。やがて第9代藩主徳川斉昭のもとで尊王攘夷思想を発展させ、明治維新の思想的原動力となった。前期 水戸学 尊王敬幕主義 「我が主君は天主なり。」徳川光圀
根本正は神職の佐川伊豫之介の塾に学び水戸学を水戸彰考館総裁、豊田天功、小太郎父子に学んだ。

○ 終わりに

退職後13年ボランティア活動8件、歴史講座527回参加、資料収集、図書館中心に430冊を数えました。又講師、ガイド依頼が10数件ありました。

「彰往 考來」——過去を振り返り未来を考える。4書5経、春秋左氏伝の序から取った歴史の目的である。これからも勉強していきたいと考えています。

那珂市文化財愛護協会 会員

「酒は百薬の長」に導かれて

小堀 優

先日、『長寿の文人たち』（重金敦之）を読んだ。冒頭に「酒は百薬の長」とある。一気に、昭和44年、大学3年時にタイムスリップした。HとNと私の三人だけの授業中。I先生曰く。（私の記憶に依れば、次のようにあった。）

「酒は、陽気を満たし楽しみを広げ、ハッハの笑いに誘う。 $8 \times 8 = 64$ 。時にまた、悲しみを抱き留め愁いに寄り添う。しくしくと泣けば、 $4 \times 9 = 36$ 。 $64 + 36 = 100$ 。ゆえに「百薬の長」。」

妙に納得した。陽と陰を和するもいい。以来、折に触れ話題にし、味わって来た。

先生は、酒好きで中風を患い、少し脚を引きずっていた。絞り出す言葉は、大陸的哲人の風貌と相まって味わい深い。三人で、先生宅に泊まり、酒とお話をいただいたことも、二度や三度でない。今思えば、人間学。有難い至福の時間だった。

一日二升三合とは、恐れ入る。横山大観だ。池之端の大観記念館に残る鉢鼓洞の囲炉裏で、酒を楽しむ姿が見えるようだ。絵筆を揮うときは、自然光の下、酒は一切口にしないというのも大観流。

「絵を描くのも、酒を造るのも芸術だ」と説く大観に意気投合した「醉心」東京販売店の山根社長は、「先生のお飲みになるお酒は、一生面倒見ましょう」と約束する。戦時中は伊豆の疎開先にまで送り続けたとのこと。

「大観生誕の地」の石碑が、私の最後の勤務校の敷地の一画にあった。その後、50m程離れた実際の生誕地の一部に移され整備された。水戸は城東の地である。

日立の森島酒造の「大観」も本人が認めた名酒。私は、絵を描く酒好きの先輩にこの酒を贈って喜ばれた。最近、認知機能が低下している。酒好きとの関連は判らない。

同じく水戸出身の藤田東湖も無類の酒豪だ。自作の漢詩「讀書如飲酒」に志士の意気を感じる。「書を読むは酒を飲むが如し 至味意を会（解）するに在り 酒は以て精氣を養い 書は以て神智を益す 彼の糟と粕を去り 淋漓其の粋をぬす 一飲三百杯萬巻駆使すべし」である。東湖ならではのスケールの大きな「浩然の氣」も思う。この漢詩を東湖自ら墨書きしたものを持本にした額が、水戸市総合教育研究所の3階ロビーにある。

東湖筆の木拓「我善養吾浩然之氣」の掛け軸が我が家の床の間にある。前出の恩師に教わり心に残っていた「浩然の氣」。大学卒業の頃にこの拓本と邂逅。特別奨学生予約を得て大学に進学できた貧乏学生であったが、迷わず求めた。後年軸装にした。

もう一人、酒に関して、郷土の偉人を記したい。東木倉村（現那珂市）生まれの根本正だ。豊田天功家の家僕として水戸で学びを始めた正に、新たな「志学」の機会が訪れた。明治元年、17歳のことだ。パリ万博に随行した水戸藩士が持ち帰った時計とマッチに驚き、欧米の科学文明を学ぶことを決意する。東京などで苦学を続け、29歳で米国に渡り、10年かけて小学校から大学まで学んだ。2度の落選を経て、明治31年、

46歳で初当選してから大正13年まで衆議院議員として活躍した。その間、選挙違反者を一人も出していない。水郡線設置、高層気象観測所の創設などに尽力した。義務教育無償化の道を拓き、未成年者の禁煙と禁酒を法制化する。特に、禁酒法は、初提案から成立まで21年かかった。ちょうど百年前のことだ。

今回は、「酒は百薬の長」に導かれ、私の思い入れが強い4人それぞれの一端を綴った。これを機会に、各人への思いを掘り下げて行きたい。

酒は百薬にもなれば、百毒にもなる。時と場、心身の状況に合わせ、私なりに酒を愛でたい。秋の夜長、杯を手に本に親しむもいい。



以上は、久しぶりに「酒は百薬の長」に出会い、脳裏に浮かんだことを綴ったものである。未成年者のみならず、禁酒村まで奨励した根本正の顕彰会会報にふさわしい内容とは思わない。こういう者も会員として受け入れていただいていることに感謝します。

根本正が、藤田東湖とも横山大觀とも浅からぬ縁があることにもなぜか心惹かれる。ここに、私なりに整理しておく。

正が、最初に仕えた豊田天功亡き後、主人となったのは豊田小太郎だ。その妻は、あの豊田英雄である。若くして夫を亡くしたが日本最初の保母はじめ教育界を中心に諸分野で活躍した。その英雄こそ、藤田東湖の姪（東湖の妹の娘）である。正の結婚の媒酌を務めたのも英雄だ。また、正の東京での苦学時代には、東湖の子息、健の世話をなっている。

正の衆議院議員時代、茨城の著名人がよく正の住まいを訪問した。その中に、横山大觀もいたとのことである。酒を振る舞ったかどうかは定かでない。

9年後の根本正生誕180年に向けて本会の充実・発展を祈念します。

「根本正先生の生き方に学ぶ」

コロナ禍のために参加者を制限しての開催であったが、意欲的な那珂市の先生方の参加で、有意義な研修となった。教育の柱に「根本正先生の生き方に学ぶ」を掲げている那珂市の教育を担う先生方の中核として、この教育推進のため、各学校で推進役をされている先生方の熱意ある眼差し・師勢に満ちていた。

本顕彰会からは、山田会長、仲田事務局長、小堀理事が参加した。仲田事務局長が、次ページ以降の資料をもとに、自分の少年期、教育者としての思い・体験を交えて分かりやすく情熱的に、参加の先生方、その先にいる小中学生に語りかけた。

○ 仲田事務局長講話「根本正先生の生き方に学ぶ」

次ページとその次のページをもとにされた講話の中から、そこに直接は記されていない内容で特に私（小堀）の心に染みたことを順不同で列記する。途中からの参加と私の聴く力不足で、講師の意を伝えきれないことをお断りする。

- 岩瀬高校に新任し、38年間の教員生活でいろいろの生徒との出会いからの学びを、講話の要所要所にちりばめ、現役の先生方の意欲に火を灯した。
- 「より高い学問に触れたい」と親類筋の豊田天功家に「家僕でもよい」との覚悟で水戸にてた（12歳の決意）。土と農の身分上の差を実感したことは、その後の「平等」についての言動の礎となったものと思う。
- 先進文化；「マッチと時計」との出会いに新鮮な感動を受け、20歳で東京に出る意欲と実行について考えるなかでの、次のことを先生方に投げかけられた。

「何を示せば、子どもはどう反応するか」

「教師自らが感動しなかったら、子どもは感動しない」（学ぶ教師の姿勢こそ）

- あの西郷隆盛はじめ、全国の有力者から尊敬された藤田東湖の先祖は那珂市の出
- 28歳で渡米。小学校からのやり直し。努力していれば、支援者は必ず出てくる。
郵便局員ファー 弁護士バラストー 鉄道王ビリングス
恩に報いる努力（大学卒業時の代表10人の一人に） 感謝（息子の名「美倫」）
- 忘れない感謝の念
 - ・水郡線敷設に係る政府担当官の心（雨中の視察で幌なしにこだわる意気）
⇒山方宿での開通祝賀会。挨拶で功労者として賞賛
 - ・衆議院議員落選の弁における感謝の言葉

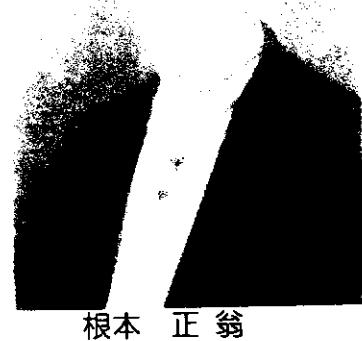
- 人生訓「踏まれても根強く忍べ路芝のやがて花咲く春をこそ待て」等をもとに。
 - ・全てのことに挑戦 ネバー・ギブアップ
 - ・感動を受けられる子ども
 - ・人は皆同じ それぞれのよさを認められる心の寛さ

「根本正先生の生き方に学ぶ」

1 根本家とは

（1）家庭環境

- ① 東木倉村庄屋の二男であり財産と時間がある
- ② 親族関係 祖父は学問があり、6・7歳頃は祖父について読み書きを習う
姻族に水戸彰考館総裁 豊田天功・小太郎父子



根本 正翁

2 勉学への意欲

福沢諭吉の『学問のススメ』

人間は平等と言われる、しかし現実には差がある。

差がないように、人々は積極的に学問に励め。

根本正の勉学の意欲はどこから出て来るか

（立志 ≒ 自分はどのような生き方をするかの決意）

3 水戸へ出る（12歳）

なぜ出たのであるか 「より高い学間に触れたい」

水戸には『大日本史』を編さんする彰考館の総裁、豊田天功がいた。

「家僕でもよい」幸い名高い先生がいる。 （いなかつたらどうしたか？）

農民にも差はあるが、土・農の身分上の差は絶対的であることを実感する。

平等とは、「神はかたよらず」神の下に人間は平等）（法の下に権利は平等）

個々人は不平等（それぞれの能力がある） ⇒ 「みんな違ってみんな良い」

4 先進文化：「マッチと時計」との出会い（新鮮な感動と挑戦）

こんな便利なものは「余程よほりこう」人が作ったに違いない」 ⇒ どんな人か？ 英語だ！
英語を学びたい、しかし水戸では良い教師がない ⇒ 明治4年（1971）友人と東京へ
※ この積極的意欲と実行力を生みだしたもののはなしにか？ （20歳）

5 行動が人との結びつきを生み出す（積極性がさまざまな出会いを創り出す）

目的に向かって、自らの力で生活を進める意欲（生活力・生きていく力を發揮）

中村正直の『西国立志篇』との出会い

「イギリス人などの方が、苦難を克服し勉強して偉くなった」（自立・自律心）

「キリスト教の精神」 ≒ 神の下に平等であるを学ぶ

『日々の力』翻訳（キリストの教えを一日一話としてまとめた）

6 渡米

中村正直の同人社に5・6年居ても英語で話すことも出来ない ⇒ ならば、どうするか?
アメリカへ行って小学校からやり直そう。 大学まで行かなくてはものにはならない!!
渡米への努力（横浜郵便局でのアルバイトなど 資金獲得に）
努力していれば、支援者は必ず出て来るものである

渡米に当たって 郵便局員ファーの紹介 ⇒ 弁護士バラストー
大学進学に当たって バラストーの紹介 ⇒ 鉄道王ビリングスの支援
(息子に命名ニ美倫) (感謝)

7 英語を学んで、それによって何をしようとするのか (目的意識・目標)

学問とは何を学ぶのであろうか

(1) 是非ボストンへ行ってみたい。 独立戦争の記念塔バンカーヒルへ
「独立戦争の時に、アメリカ人がどれだけ苦戦したか、その実情を偲んでみたい」
(いくら自分が鈍くても、啓発されるところが大であろう)
「(壊れたイギリスの大砲を見て) アメリカは独立したのだ、この意気で行こう！
「どんな苦しいことでも、この精神を持ってやったならば、必ずできる」との確信！

(2) 大統領ガーフィールドの暗殺

いかなる親友といえども不正はしない、これこそ本当の忠君愛国である
「誤りを以て成功するよりは正義を以て死ぬのが何より愉快だ」
ガーフィールドは貧窮の家の出身である、
アメリカには、小学校は無償で誰でも受けられる自由教育がある
貧乏人の子でも立派になって大統領にまでなった、教育の成果である！

(3) まず、学ぶ機会の平等の実現に奔走しよう、そのためには政治家をめざそう！

(4) アメリカでの体験「体得した4つの処世術」

神はかたよらず 受くるより与えることは幸いなり
善を知りて行わざるは罪なり 貧は富をつくる

8 政治家としての理念

<天下国家への貢献> 教育問題（義務教育無償） 高層気象観測所
青少年健全育成（未成年者禁煙禁酒法） 移民先の調査

<地元への貢献> 水郡線敷設 横利根閘門設置 村松砂防林造林

9 人生訓

粘り強い実践力（諦めない：ネバー・ギブアップ） 「古歌：踏まれても根強く忍べ云々」

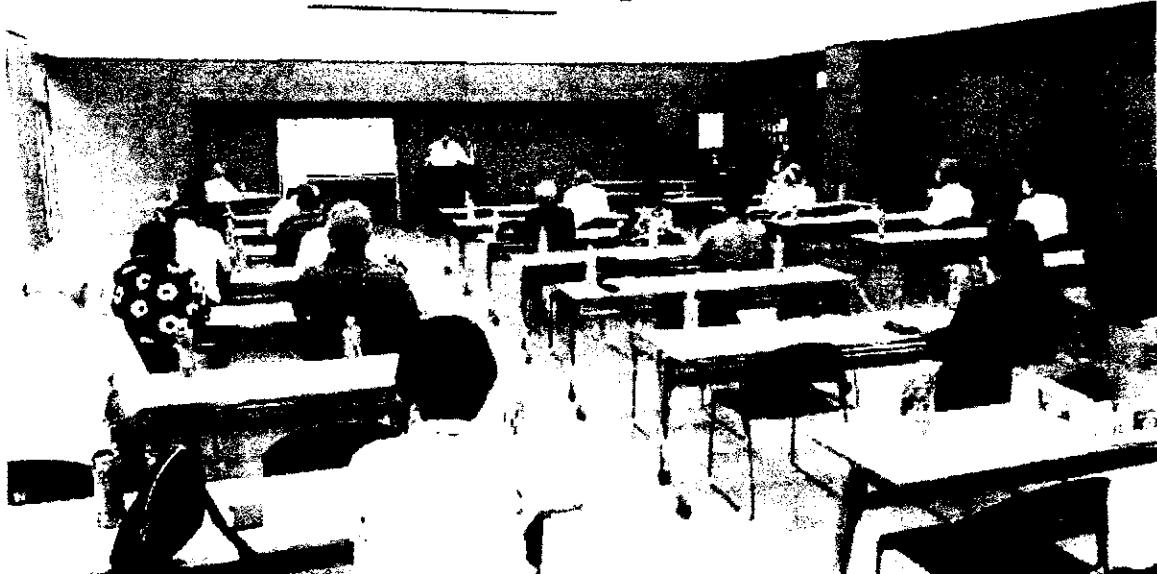
※ 今、自分はどんな人間になろうとしているのか、もう一度自分に聞いてみよう！

根本正顕彰フェスティバル

令和4年度は五台地区まちづくり委員会との共催で開催しました。コロナ禍のために延期されたものですが、根本正の生き方を今に生かすためにも、学び続けることが大切であると考えます。開催準備等ご尽力いただきました五台地区まちづくり委員会の皆さん方に厚くお礼申し上げます。

フェスティバル内容

- 1 日 時 令和4年8月28日(日) 13:30 ~ 16:00
- 2 会 場 那珂市ふれあいセンターごだい 多目的室
- 3 参加者 40名



4 内 容

- (1) 開会のことば 根本正治副会長
 - (2) あいさつ
- ① 五台地区まちづくり委員会 委員長 増子健一氏



根本正先生生誕170年の意味合いを込めて、生誕地五台で開催できることを喜びとする。三班五台小学校を訪問したところ、校長から根本正先生の生き方から「忍耐」「感性」「思いやり」「実行力」などに学ぶ教育を進めている旨をうかがい、喜びとした。地区としてもこの心を共にしながら地域の発展を期していきたい。

② 山田正巳・根本正顕彰会会长



当顕彰会は平成9年に発足して以来、会員はもちろん関係者の努力を以て今日まで活動を続けてきた。まちづくり委員会のご協力の下、ここ根本正先生生誕の地でフェスティバルを開催できることは、今後の会の発展のためにも大きな力となる。

今後も、まちづくり委員会のお力もお借りしながら、若い世代にも根本正先生の心が伝わり広がるよう創意工夫を重ねて活動を進めてまいりたい。

本日、顕彰フェスティバルが無事に開催できたことは、町づくり委員会の大きな支援のあったことからであり、深く感謝申しげたい。

(3) 講演

① 前会長増子輝雄氏

「学び続けてた青春・文教地区『清水原』」

根本正先生の学問への意欲と文教地区となった五台地区について述べたい。

根本家は東木倉村の庄屋であり、親戚に里美地区の庄屋豊田家があった。祖父に学問的要素があり、彰考館総裁を務める豊田天功とその子小太郎が身近にいた。学問への意欲を起こし、その実践力が大成へ導いた。環境と実行力が不屈の政治家根本正を生み出した源である。

また、根本正の好奇心と新鮮な感動力は物事への動機づけの源泉である。これに実行力が伴って米国への留学となる。並みの行動力ではない。多くの意園舎のいたことも幸いであったが、支援者が表れるのも根本正の賢明さ・努力の表れである。

帰国に際して、欧州諸国をめぐってさらなる研鑽を積んだことも、彼の意欲の表れである。人はあくなき探求心をもち、その実践者でなければならない。我々が今日根本正先生から学ぶところは、ここにある。

五台地区は館内外から見ても教育機関が集中している地区である。明治22年(1889)の五台小学校創立以来、茨城学園、茨城女子短期大学校、茨城県立水戸農業高等学校、大成学園幼稚園、那珂市立五台幼稚園、茨城県立那珂高等学校、那珂市立ふれあいセンターなどが次々と創立してきた。まるで根本正の精神が呼び込んだかと思えるほどである。

その地名、「東木倉」「清水原(しみずっぱら)」「教育施設の充実」が全国的代表



書『角川日本地名大辞典』に掲載されている。驚くべきことである。

このような誇り有る人物と故郷を持つ我々は、先人の知恵を生かしながら、心豊かな地域づくりに励んでまいりたいものである。

② 理事仲田昭一氏

「五台村の尊王事蹟三題」

根本正は尊王家でもある。大正4年の大正天皇御即位大典に招かれて感激、その記念にと根本正・徳子夫妻の名を以て記念誌を発行している。

三題の一つに「植桜の記碑」の建立がある。現在は、国道118号の西木倉坂下に架かる山崎橋の袂、小場江用水路のり面に建っている。元は、未舗装の国道沿い桜並木の途中に建っていたものが移転されたものである。日露戦争後、勝利を誇り驕りと怠惰が見られた国民を教諭するために出された明治天皇の「戊申詔書」を受けて、気風刷新に立ち上がった各地の青年団、西木倉戊申青年団が桜を植えて日本精神を取り戻そうとされたものである。

次は、昭和天皇が昭和4年11月に水戸で行われた陸軍特別大演習の際、かつて水戸藩の軍事演習場とされてゐた清水原一帯を、愛馬吹雪に跨って中台から東木倉・西木倉を御巡幸された記念誌と記念碑について。

記念碑は昭和11年11月に五台村の村民によって、小学校の正門近くに建立された。しかし、昭和20年の敗戦によってか、現在はその跡形もない。だれもその行方を知らない。語らないのか。GHQを恐れてのことか？

三つめは、平成28年に掘りこされた皇太子（昭仁親王：現上皇）の御誕生を記念した御影石製の道標建立である。五台村戊申青年団や田向青年団がお祝いとして建立した「道しるべ」が、国道118号線豊喰地区の拡幅工事中に、掘り出された。浅川清司社長の起点によって破壊されずに保護され、現在会社の敷地内に再建されている。同じく、GHQに配慮した破壊であろう。

このような事蹟を残すのは、那珂市内ではここ五台地区のみである。歴史と伝統を守り、この心を今日に生かしながらさらなる発展を遂げることを期待したい。

<質疑応答>

① 五台地区出身の根本正代議士、故郷を離れての生活であるため、地元での活動が見えにくいが、茨城県内での矯風会活動などかなりの活躍も結構見えてきている事実も認識しておきたい。

（県内の講演会記録などがかなり残されている）

② 高層気象観測所の設置に貢献した事実に感激したことがある。

（観測所の設置は明治43年の那珂湊沖の海難事故がきっかけである。最近関連の大舞台劇が演じられ話題となった。根本正先生の様々な活動・活躍を踏まえて地域の発展

に心がけていきたい）

（4）閉会のことば 横地富子副会長

なお、会場には鴻巣地区の高畠操坂から寄贈された根本正先生の真筆「忠孝无二」と和歌「皆人の本のこころはますかがみみがかばいかで曇りはつべき」2点と市歴史民俗資料館および斎藤郁子さん作成の「根本正の生涯」が展示されました。

※ コロナ感染症の第7波が押し寄せる中、決断開催された根本正顕彰フェスティバルは、参加者の熱意を以て成功裏に終了した。実施したこと意義がある。地道な活動を続けてまいりましょう。



郷土が生んだ不屈の政治家
「根本正」顕彰フェスティバル

期日 令和4年8月28日(日)

会場 ふれあいセンター ごだい

日程

区分	時間	備考
1 開会のことば	13:30	
2 挨拶	13:35~	五台まちづくり委員会委員長 増子 健一
3 講演		根本正顕彰会会长 山田正巳
第1部 学び続けた青春・文教地区 「清水が原」	13:40~14:40	講師 顕彰会顧問 増子 輝雄
第2部 五台村の尊王事績3題	14:50~15:50	講師 顕彰会理事・事務局長 仲田 昭一
4 質疑応答	15:50~16:00	
5 閉会のことば	16:00	

共 催 根本正顕彰会 五台まちづくり委員会

講 演 第一部

学び続けた青春・文教地区「清水原」

1. 生い立ち

根本 正は嘉永4年（1851）東木倉村（現 那珂市東木倉）で父徳孝・母はやの間に次男として生まれた。根本家は農業を営み庄屋を務める家柄であった。そして、水戸徳川家のために骨身惜しまず忠勤を尽くしていた。

正の祖父は学問的要素のあった人で、正が6～7歳の頃の少年時代に祖父より「読み・書き」を習った。正が9歳のときから神主の佐川伊豫之介の塾に通って学んだ。



2. 水戸に出る

正が13歳のとき、もっと上を目指して学びたいということで水戸に出て行くこととなった。正の父徳孝の従兄弟で「大日本史」編纂をする水戸彰考館の総裁であった豊田天功の家僕となった。豊田天功は当時水戸上市の新屋敷といわれる地（現在の水戸市立新莊小学校辺り）に屋敷を構えていた。天功に仕え、天功亡きあと長子の豊田小太郎に仕え学問、武芸等を学んだ。豊田小太郎が暗殺され、亡きあと水戸藩南御郡方役となる。

その翌年正が17歳のとき、水戸藩御郡方奉行服部潤次郎からフランスのパリ万博土産の「時計とマッチ」を見せられ大変驚愕し、それらを生み出した背景にある外国語（英語）を学ぼうと決意する。

3. 東京へ出発

正が20歳のとき水戸藩の役人を辞めて上京する。人力車夫をし、その後警視庁の巡査になり働きながら蘭学者簗作秋坪の「三叉学舎」、翻訳者中村正直の「同人社」に学んだ。この中村正直との出会いがリスト教入信へのきっかけとなった。その後駅逕寮（外国郵便）に就職し、神戸、横浜局に勤務した。

横浜で働きながら「ヘボン塾」に入門し英語を習った。そして横浜の住吉教会で洗礼を受ける。こうして学びながら渡米の機会を探っていた。

東京に出てからの生活と学んだ塾

- 明治 4年 = 上京し人力車夫をしながら箕作秋坪の「三又学舎」に学ぶ
明治 5年 = 警視庁の巡査となる。中村正直の「同人社」に学ぶ
明治 7年 = 巡査を退職し駅逓寮となる。引き続き同人社に学ぶ
明治 8年 = 外国郵便も扱う神戸局に転勤する。同人社を退学する。
慶應義塾の分校というべき京都宇治の義塾に入り英語を学ぶ
明治 10年 = 横浜局に転勤する。ヘボン塾に学ぶ
明治 12年 = 米国に留学する

4. 米国留学

正が28歳のとき横浜郵便局に勤めるアメリカ人の紹介で渡米することになった。アメリカのオークランドの小学校に入学し、弁護士のバラスト一家で働きながら2年間で小学校を卒業する。続いてポプキンス中学校に入学し寄宿舎の給仕などをしながら4年間学んだ。中学校卒業後バラスト一家の紹介でバーモンド州の富豪ビリングス氏にお世話になり、バーモンド大学で4年間学んだ。卒業式には代表10名の1人に選ばれ英語で演説している。10年間のアメリカ留学で多くのことを学んだ。

留学を終えてアメリカからの帰路見聞を広めるため、ビリングス氏の支援を受けてイギリス、ドイツ、フランス、イタリアの4カ国を視察して日本に帰国する。

5. 政治家を目指す

米国留学から帰国後帰郷しているとき、板垣退助伯爵から電報で愛国公党（後の政友会）への誘いを受けた。そして入党し政務調査員となり調査研究、各地への遊説、翻訳書の出版などをしながら政治家を目指すこととなる。

明治23年（1890）第1回総選挙、続いて明治27年（1894）の第3回総選挙に立候補するもいづれも落選する。

明治31年（1898）第5回総選挙に立候補し初当選を果たす

根本正と水戸学

水戸学との出会い　根本正の生涯に大きな影響を与えた水戸学、その學問との出会いについて根本は「回顧八十一年」の中でおよそ次のように語っている。

一三歳の時分に水戸の城下へ出で、豊田天功の家僕・家来となつた。天功は親の従兄弟に当たり、「大僕・家来」となつた。天功は親の従兄弟に当たり、「大

日本史」を編さんする史館「彰考館」の總裁であった。「向こうは士族、私は百姓で下僕即ちいわば家来」の關係であった。そのうちに天功先生が亡くなられので、お子さんの小太郎先生に学ぶことになつた。家来は下駄を履くことが出来ない。雨天の時には草鞋を履いてお供をする。士族が来れば、草鞋を脱いでお辞儀をしなければならない。大変な上下関係の違いがあつた時代、ちょうど元治元年（一八六四）のことであつた。

この頃、日本は開国・鎖国をめぐって混乱を深め、水戸藩内でもその影響から天狗派と諸生派に分かれ対立が激しくなつていた。それはやがて元治元年（一八六四）の筑波山事件へと発展していった。この争乱は、天狗派においては武田耕雲齋の家族をはじめ多数の藩士が処刑され、反対に諸生派もまた家老市川三左衛門が逆さ磔にされるなど、残酷な仕打ちの繰り返しを生んだ。その対立は、領民をも巻き込んで、後々まで怨恨が残る負の遺産となつていくのであるが、そのような水戸藩の物騒な時代の中で根本は多感な少年時代を過ごしたのである。學問的にも、精神的にも、水戸は根本の一生に大きな影響を与えたのであつた。

義公様御壁書　さらにより具体的に光圀を尊敬していたことを示すものは、次のような「義公様御壁書」である。根本正はこれを名刺の裏に印刷し、自分の信念として多くの人々に示していた。

- 一 苦はたのしみの種、樂は苦のたねと知るべし
- 一 主人と親とは無理なるもの（従わねばならない）と思へ、下人は足らぬもの（物わかりが悪い）と知るべし
- 一 子ほど（子が親を慕うように）親を思へ、子無きものは身にた比べる（自分を他と比較し反省する）ちかき 手本を知るべし
- 一 おきてに怖ぢよ（よく守り）、分別なきものにをぢよ（十分注意せよ）、恩を忘るる事なかれ
- 一 慾と色と酒とをかたきと知るべし
- 一 朝寝すべからず、咄の長座（長い無駄話）すべからず
- 一 小なる事は分別せよ、大なる事は驚くべからず
- 一 九分はたらず、十分はこぼると知るべし
- 一 常に最高を目指して努力をせよ。しかし、これで達成したと満足してはならない
- 一 分別は堪忍にあるべしと知るべし（大事な事は人を許す広い心を持つこと）

（根本正伝より）

根本 正「青少年時代の年表と主なできごと」

西暦(年号)	年齢	根本正関係	国内の主なできごと
1851年 (嘉永4年)		東木倉村(現那珂市東木倉)に生まれる	アメリカペリー艦隊が浦賀に来港(1853年)
1857~8年 (安政4~5年)	6~7歳	祖父より読み・書きを学ぶ	
1860年 (万延元年)	9歳	神主佐川伊豫之介の塾に学ぶ	桜田門外の変(1860年)
1863年 (文久3年)	12歳	豊田天功の家僕となる	
1864年 (元治元年)	13歳	豊田天功死去 子息豊田小太郎に仕える	藩内抗争 天狗・諸生の乱 水戸「天狗党」として西上し、加賀藩に降伏(1864年)
1865年 (慶応元年)	14歳	豊田小太郎京都で暗殺される	武田耕雲斎・藤田小四郎ら352名処刑される(1865年)
1867年 (慶応3年)	16歳	水戸藩南御郡方役人となる	大政奉還(1867年)
1868年 (慶応4年)	17歳	水戸藩東御郡方奉行服部潤次郎からパリ万博土産の時計とマッチを見せられ、カルチャーショックを受ける	
1869年 (明治2年)	18歳		諸生党の重鎮市川三左衛門処刑される(1869年)
1871年 (明治4年)	20歳	役人を辞めて上京し、働きながら学ぶ 以下アメリカ留学へと続く	

地名「東木倉・清水原～教育施設の充実」

ひがしきのくら 東木倉〈那珂町〉

那珂川下流左岸に位置する。先土器時代～縄文時代の東木の倉遺跡がある。文祿4年7月16日の佐竹義宣知行充行状写「一、百五拾石也〈那賀郡内〉東木倉の内」と見え(大綱嘉兵衛文書／家蔵文書)、佐竹氏家臣大綱氏の知行地であった。

〔近世〕東木倉村 江戸期～明治22年の村名。常陸國那珂郡のうち。はじめ佐竹氏領、のち慶長14年からは水戸藩領。村高は、寛永12年「水戸領郷高帳」297石余、「元禄郷帳」271石余、「天保郷帳」293石余、「昭高簿」403石余。「水府志料」によれば、常葉組に属し、戸数15、村の規模は東西4町余・南北8町余、小場江用水の用水渠(長さ242間)がある。神社は吉田明神(新編常陸)。明治4年茨城県、同11年那珂郡に所属。明治22年五台村の大字となる。

〔近代〕東木倉 明治22年～現在の大字名。はじめ五台村、昭和30年からは那珂町の大字。明治24年の戸数43・人口301。昭和42年大成学園茨城女子短期大学設立。昭和36年一部が水戸市中河内町・柳河町となる。

教育施設の充実 当町域からは、根本正のように、アメリカの大学で学んで帰国した後、明治31年から大正13年まで、スルノ間代議士として活躍し、「国民教育授業料全廃の建議案」「小学校教育費国庫補助法案」を提出して議決させた人物も出ている。明治41年菅谷村ほか10数か村で、学校組合として菅谷農学校(乙種)が設置された。財政的理由で大正11年廃校となるが、那珂・久慈・東茨城各郡から多くの子弟が学んだ。第2次大戦後の学制改革により中学校は創立されたが、高校以上の教育機関はなかった。昭和42年、東木倉に大成学園茨城女子短期大学が設置されたことは、当地の教育・文化の向上に刺激を与えることとなった。同45年県立水戸農業高校が西木倉に移転し、農業教育推進の上で大きな展望を開くこととなった。

(角川日本地名大辞典より)

しみずっぱら 清水原〈那珂町〉

那珂町南部の五台地区にある原。標高30m前後で那珂台地の一部をなす。南側は段丘崖をなし、そこから広大な沖積平野が広がって、両者の境界付近を小場江用水が流れる。「水府志料」後台村の項に「株野 拾七町歩余有。中台、東木倉、西木倉、豊喰等大方入会の地にして曠野也。都而清水原と云。府下の土此野に出て火矢、烽燧等の火術を学ぶ所とす」とある。徳川斉昭の時代には練兵場・射撃練習所であった。中台北部には明治末頃まで長さ200mの土塁があり鉄砲場と呼ばれていた。明治期には草刈入会地をめぐり、那珂川沖積低地の坪井方の中河内篠・下国井・西木倉など5か村と台地上の野方の東木倉・五台・豊喰村など4か村との間に争いが起こり、明治14年に県知事に調停を申請したが解決まで数年を要した。これを清水原事件という。現在は水戸市の近郊地域として都市化が進み、高校や短期大学も進出し、文教地区を形成。

五台地区「清水原」に集結する教育施設

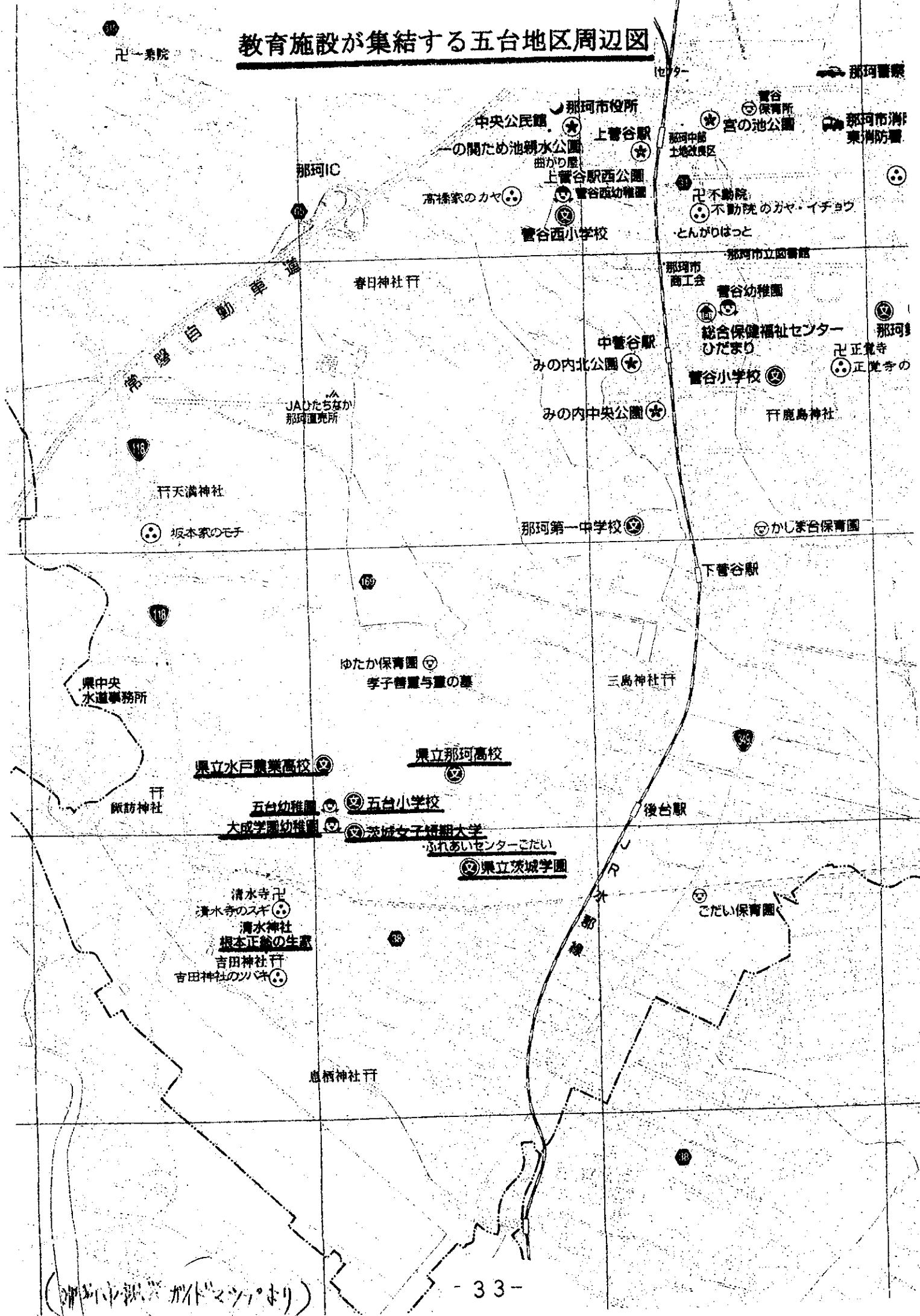
平成22年11月30日現在調

教育施設名	創立又は移転	生徒数	水郡線利用通学者	備 考
那珂市立 五台小学校	明治22年 東木倉地内に創立 大正15年 現在地に移転	483名	—	
茨城県立茨城学園	明治43年 水戸市内に創立 昭和11年 水戸市より現在地 に移転	60名	—	児童自立 支援施設
茨城女子短期大学校	昭和42年 現在地に創立	170名	15～ 20名	
茨城県立 水戸農業高等学校	明治28年 水戸市内に創立 昭和45年 水戸市より現在地 に移転	900名	全学年で 243名	
大成学園幼稚園	昭和46年 現在地に創立	120名	—	
那珂市立 五台幼稚園	昭和49年 現在地に創立	35名	—	
茨城県立 那珂高等学校	昭和60年 現在地に創立	480名	全学年で 212名	
那珂市立 ふれあいセンター ごだい	平成21年 現在地に創設	—	—	地域交流 社会教育 活動拠点

教育施設が集結する五台地区周辺図

卷之二

新编藏书票



五台村の尊王事蹟 3題

1 「植桜の記」碑建立 （大正4年：1915）

— 西木倉戊申青年同志会の小場江堤上および街道沿い江の桜木の植樹 —



「植桜記碑」は、大正4年（1915）11月、西木倉青年同志会によって小場江用水路堤上に建立された。明治38年（1905）に終結した日露戦争は辛勝であった。しかし、内実を知らされなかつた国民は大勝と信じ、ポーツマス条約に納得しない人々は日比谷公園で講和反対国民大会を開き、それは焼き討ち暴動に発展した。戦勝に酔った国民の間には、やがておごりや怠惰、浪費の風潮が現れた。それを憂えられた明治天皇は、明治41年（1908）10月13日、いわゆる「戊申詔書」を発布せられ、国民は心を一つにして軽佻浮薄を正し、質素儉約・勤勉出精に努めるようにと呼びかけられた。

これを受けて、詔書の精神を弘め実践するために全国的に地方改良運動が展開された。具体的には地域林の造成、健全財政

への納税推進、生活改善、勤僕貯蓄、時刻励行などであり、「刻苦精励」を基とする気風の刷新運動である。その実践組織として、各地に「戊申青年団」などが設立された。「西木倉青年同志会」もその一つである。

この同志会は、共同一致して村事に尽くそうと決議し活動に努めた。時あたかも大正4年11月10日、大正天皇御即位の大典が行われた。会員一同は、その記念事業として小場江用水路堤上および西木倉台から中河内に続く新街道沿いに桜樹数百本を植樹し、碑を建てその意を後世に伝えようとしたのである。

碑文は水戸学者である栗田勤が記した。いわく、「桜は日本特有の名木にして、開花すれば爛漫・清艶、芳香は四方に満ち溢れ、日本魂の証しである。ああ、これより以降、この樹の繁茂し、日本の永遠を祝すことは、国民の赤誠を表すことでもある。村民こそぞて戊申詔書の精神を遵奉して美風を養えば、単にこの地域のみならず、国家の發展も期すことができよう。そうすれば、この事業も日本魂の發露となり、この桜と同様に永くその美を伝えてゆくことであろう（要約）」と。

この桜樹はやがて成木となり、行き交う人々は、春爛漫の花を愛で、繁茂する青葉で夏の炎暑を避け、秋には紅葉を楽しみ、冬には天空に伸びる樹



(写真：西木倉戊申青年同志会一同)

枝の群れに勇気を得たのである。この碑は、国道 118 号沿道西側に桜樹に囲まれて建っていたが、昭和 40 年（1965）初め、国道の拡幅工事により山崎橋西側の杉林内に移動、桜樹も伐採されて往時の面影は残っていない。

【植桜の記】

戊申詔書の渙発せらるるや天下靡然として風動し、人々みなよく聖旨を奉じ、国運の發展を期せざるものなし、地方到るところ青年会の設けあるもまた、専ら遷善矯弊の実効を挙げ、以て聖旨に応えんと欲すればなり、茨城県那珂郡五台村西木倉、既に青年同志会なるものあり、その戊申詔書を拝讀するに及び感激措かず、更に規約を定め共同一致以て力を村事に尽くし、その施設するところ著しく觀るべきものあり、ことし乙卯十一月今上天皇まさに即位大嘗祭を行わんとす、實に国家の大典なり、會員あい議し、桜樹数百株を西木倉沿道の小場江堤上に移植し、以て大典の記念に供せんと欲す、乃ち力を協せてその労に服し、日ならずして桜樹林立し、實に邑里の美観となる、ここにおいてか碑を立てその事を記さんと欲し文を余に嘱す、余曰く、善かなこの挙、それ桜は神州特有の名木にしてその開花するや爛漫芬芳、清艶秀絶にしていわゆる日本魂の表章なり、ああ自今以後、この樹の繁茂により、恭んで宝祚の無疆を祝し以て臣民の赤誠を表し、またよく戊申詔書の聖旨を遵奉し、これ義以て勤儉醇厚の美風を養成せば、則ち豈ただに遷善矯弊の実効を挙ぐるのみならんや、國運の發展もまた以て期すべきなり、然れば則ちこの挙の如きもまた日本魂の發顯にして、かの桜花と永くその美を嫋ぶべし、と、

大正四年歳次乙卯秋

水戸 栗田勤撰文并びに書及び篆額

（原漢文）

2 「永念巡幸の碑」建立（昭和 5 年：1930）

— 陸軍特別大演習と昭和天皇の五台村御巡幸 —

この昭和天皇の御巡幸は、昭和 4 年（1929）11 月 15 日から 18 日までの 4 日間の日程で行われた陸軍特別大演習の際になされたものである。これを記録した「五台村御巡幸紀事」は、御巡幸があった年から 7 年後の昭和 11 年 9 月 30 日に、五台小学校の黒沢哲二校長が当時の記録や聴き取りによりまとめたものである。

「永遠ノ記念」

昭和四年十一月水戸を中心として常総の野に陸軍特別大演習を挙行せられ、畏くも聖上陛下には、茨城県庁の大本營に行幸遊ばされ、親しく四万余の貔貅を纏わせ給う。

次で十一月十八日水戸高等学校賜饌場より御還幸遊ばされた。

陛下には、直に御愛馬吹雪に御召しになり、午後三時大本營を御出門、万代橋を渡らせられ、青柳を経て、中台並木より左折し、所謂通学道路を一直線に、学校東側道路を御通りになられ、住宅裏へ御出で、午後三時四十分本校正門前を御通過遊ばされ、天神窪に向かわせられ、西木倉高台の畠道を進ませ給い、東木倉坂道を御下りになられ、観音堂側より再び学校に向かわせ給い、松林中頃より御引き返しになり、林沿いの細道を進ませ給う。途中檜枝垂れ蔓より、陛下御親から避け給いしと云う枝、今も切らずにあり。

かくて中台県道に御出での上、御機嫌麗しく大本營に御還幸遊ばされたり。

以上は、当時の奉拝者の講話と簡単なる謹記とを綜合し、この光栄を永く後代に伝えんと欲し、ここに

謹んで之を記す。（原文はカタカナ入り）

昭和十一年九月三十日

校長 黒沢哲二

貔貅（ひきゅう）（屈強な軍人たち）

「巡幸永念之碑」

昭和四年十一月十八日

天皇陛下には高松宮殿下御同伴にて親しく本校附近を御巡幸遊ばされた本村の光栄を永く伝えんが為め、校門側に記念碑を建立し、毎年十一月十八日を御巡幸記念日と定め、御聖徳を偲び奉る。

昭和五年 九月十五日工事着手

同 十月八日建碑竣工

同 十一月三日建碑式举行

揮毫 元水戸中学校長 菊池謙二郎氏

碑文（正面）

「巡幸永念之碑」

菊池謙二郎謹書碑陰文

菊池謙二郎謹書

（裏面）

昭和四年十一月十八日觀兵式終了後、天皇文武官三十餘人を從へて卒かに此地に出御あり、闇村遍く鳳輦の轍を印せられ芻蕘齊しく聖慮の忝きに感泣す
乃ち永く之を後昆に傳へむと欲志村費を以て爰に此碑を建つ

昭和五年十一月

五臺村住民 （原文はカタカナ入り） 节葬 くさかりときこりから微賤・庶民の意

五台尋常小学校と巡幸永念之碑

現在の水戸農業学校側に正門がありました。写真（昭和10年代：塩野忠氏提供）からは校門の門柱が見え、右手に奉安殿が見えます。奉安殿は、天皇・皇后両陛下のご真影と教育勅語を安置するために昭和12年頃から全国の小・中学校に造られたもので、火災や盜難を防止し、また保存・尊厳の維持のために当時としては珍しい鉄筋コンクリートまたは土蔵で造られました。その上大きく頑丈な鉄製の扉が付けられ、さらに周囲を鉄の鎖をわたした門で囲んでありました。多くは一日でわかる校門近くに建てられ、児童・生徒は登下校の際には必ず最敬礼をしたものです。この五台小学校の正門・奉安殿付近の写真には肝心の「記念

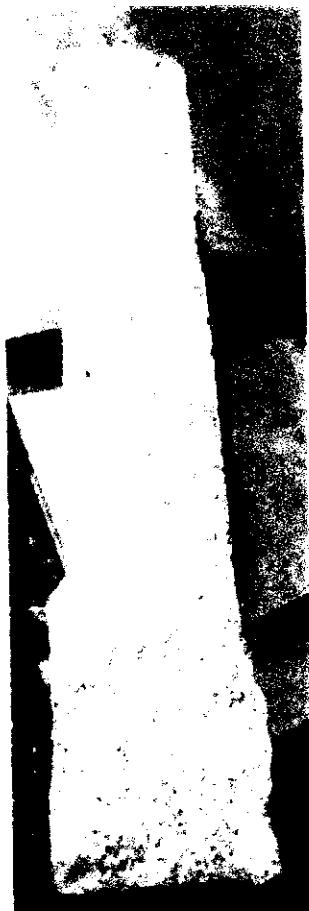


碑」は見えませんが、根本三代造氏の記憶では、この辺りに大きな碑が立っていたという。

さらに、この御巡幸の大きな記念碑（根本三代造氏の記憶ではおよそ縦3行、横1、5行）が、五台小学校の正門脇、奉安殿と並んで立っており、毎朝奉安殿とこの記念碑や二宮金次郎の像を拝して校舎に入ったこともお話をいただいた。ただし、現在はこの記念碑は小学校敷地内には見当たりません。察するに、奉安殿解体の折に撤去されたのかも知れません。占領政策への過剰な反応の一つかも知れません。全国的には、昭和5年の陸軍大演習に関する記念碑は数多く残されていますが、はたしてこの碑は何処へ行ってしまったのだろうか。

3 「皇太子殿下御降誕記念の道標」（昭和9年：1934）

— 浅川清司さんの機転が文化財（歴史資料）を救う —



本年2月初め、豊喰地内の国道118号交差点拡幅工事現場から丈104cm、幅18cmの石柱が掘り出された。浅川さんが「皇太子」の文字を見いだし、もしかして貴重なものかと歴史民俗資料館に連絡、その結果昭和8年12月23日の皇太子殿下（今上天皇）のご誕生をお祝いして、翌9年10月に建立されたものと判明した。

建立者は五台村戊申青年会と田向青年団、「道しるべ」として「菅谷・額田ヲ経テ太田方面」「兵営ヲ経テ赤塚・友部方面」「本村小学校ヲ経テ西木倉・国田方面」

と刻まれています。倒して埋められたのは、敗戦後連合軍を恐れてのことではないかと推定されています。

浅川さんは、敷地内に再建して大切に保存されています。

【道標】

皇太子殿下御降誕記念 昭和九年十月

五台村戊申青年会 田向青年団

「菅谷・額田ヲ経テ太田方面」

「兵営ヲ経テ赤塚・友部方面」

「本村小学校ヲ経テ西木倉・国田方面」

根本正顕彰会「ゆかりの地を訪ねる旅」（9月25日）を終えて

偕楽園（陰陽の妙・好文亭・「偕楽園記」・南崖の碑等）

「ゆかりの地を訪ねる旅」を終えて、ほっとしている。

2年続けて「ゆかりの地を訪ねる旅」が、コロナ禍で中止になった。根本正ゆかりの水郡線に沿った山方町・大子町・塙町方面を訪ねる旅を計画したのは、令和2年だ。3年前の台風で久慈川が大氾濫し、袋田、大子間の鉄橋が崩壊した。その復興の様子の見学も兼ね、前記3町の根本正ゆかりの場所並びに主たる史蹟を巡る計画。意義ある内容であると自負し、3年度に延期したが、叶わなかった。

コロナ禍の波が繰り返される中、今年は、バスでの旅を断念し、身近なところに現地集合での計画と

することにした。根本正が、少年期から青年期に当たり学んだ地、文教の府・水戸の史蹟に絞った。主人である豊田天功・小太郎を通じて間接的に学んだであろう斎昭の教えの大好きな史蹟、偕楽園を選んだ。

半日という時間制約の中、斎昭の思いのこもった「偕楽園記」・好文亭、そして陰陽の妙が体感できる路（表門から好文亭、見晴らし広場へのルート）を迎った。

奇しくも、今年、令和4（2022）年の干支は壬寅。180年前の壬寅、天保13（1842）年の7月1日に偕楽園が開園した。この記念の年に、改めて偕楽園についての学び直しができ意義深かった。斎昭の宇宙観・人間観に基づいた造園の趣旨が記された「偕楽園記」を音読できたこともうれしい。

天候にも恵まれた。心配した台風が予定より早く過ぎてくれた。一時、大子町に避難警報が発令され、鉄橋崩壊時の台風の悪夢が蘇ったほどだ。3年ぶりに本行事が開催できたことを喜びたい。

なお、根本副会長のご尽力で、当日の臨場感が伝わる写真と動画が顕彰会のYouTubeに載っています。次ページからの資料と合わせてご活用いただければありがたいです。



2022/10/27

『不屈の政治家 根本正伝』（顕彰会）に記されてない根本正の水戸での足跡についての情報のある方は、ご教示下さい。

根本正顕彰会「ゆかりの地を訪ねる旅」 9月25日(日) 午前9時45分～正午
 偕楽園(陰陽の妙・好文亭・「偕楽園記」・南崖の碑等)

今年、令和4(2022)年の干支は壬寅。180年前の壬寅、天保13(1842)年の7月1日に偕楽園が開園した。この記念の年に、改めて偕楽園について学び直しをするのも意義深い。

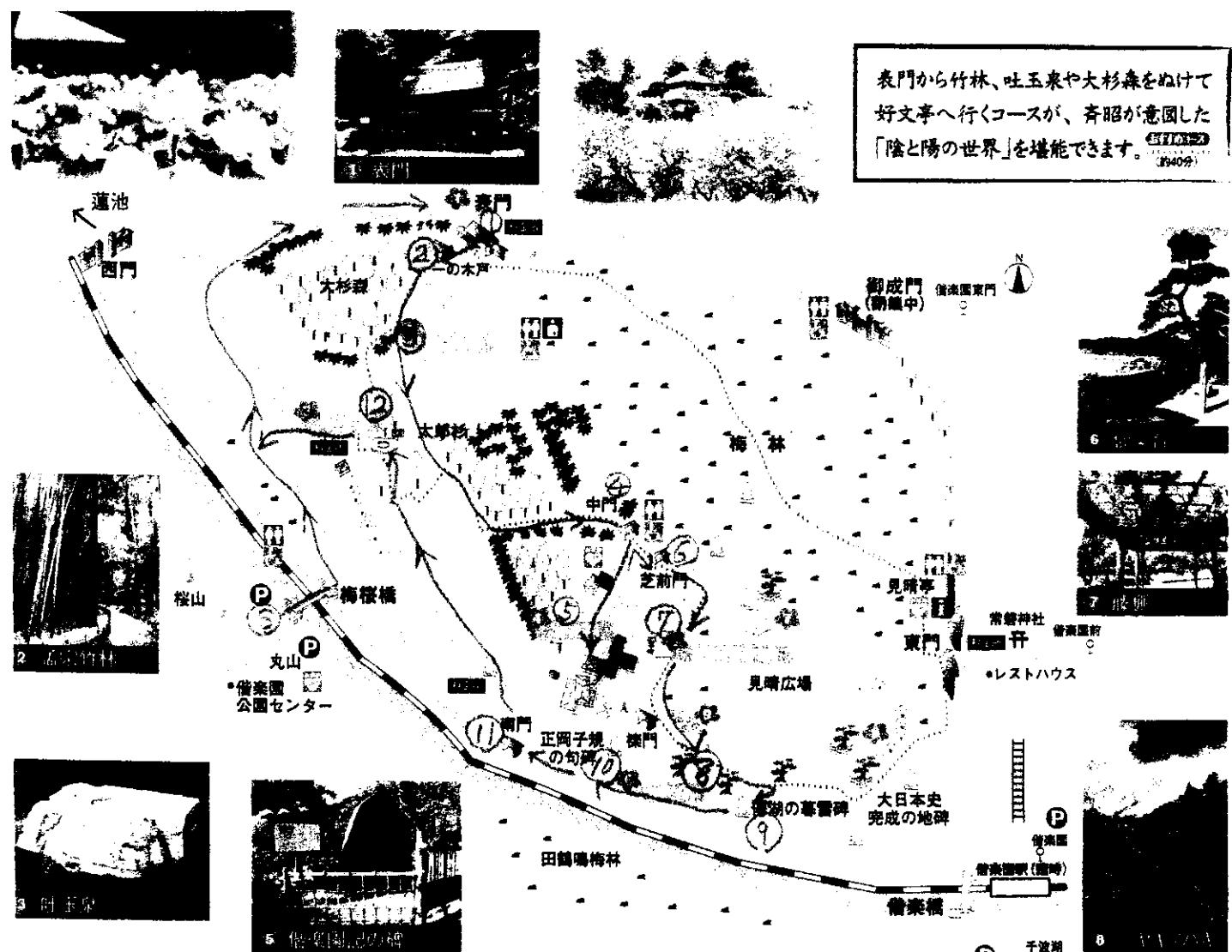
1 今回の主な見学場所とそのルート

① 表門～一の木戸～大杉森・孟宗竹林～中門(陰の世界)

～好文亭・待合・何陋庵・奥御殿・東塗縁・御座の間・西塗縁・対古軒
 楽寿樓(陽の世界)

～芝前門～偕楽園記碑～見晴広場・仙奕台(陽の世界)

～南崖(櫻湖暮雪・子規の句碑)～南門(閉門中)～吐玉泉～吐玉泉下出口



2 見学場所の概要

(1) 偕楽園

ア 水戸藩の9代藩主、徳川斉昭が造った庭園。

偕楽園・好文亭の設計はほとんど斉昭自身の構想

イ 当時から庶民が入れる藩の庭園として、公園の魁とされる。

ウ 「・・これ余が衆と楽しみを同じくするの意なり 因りて これに命じて偕楽園 は~~西朝的~~と曰う」(偕楽園記)

『孟子』「梁惠王上」に「古の人は民と偕に楽しむ 故に能く楽しむ也」

エ 開園 天保13(1842)年7月1日 同年の歳次は壬寅(今年は令和壬寅)

公園地指定 明治6(1873)年 「常磐公園」として開放

史蹟及び名勝指定「常磐公園」 大正11年3月

都市公園指定 昭和23年 「偕楽園公園」

昭和32年「偕楽園」(都市公園に関する県の条例)

日本遺産認定 平成27年 「近世日本の教育遺産群」 弘道館と一対の教育施設

オ 日本三名園 (偕楽園・兼六園・岡山後楽園)

『尋常小学読本七』明治37年 名高い公園として、この3つ

『高等小学校教科書卷一』明治43年 日本ノ三公園

(2) 表門(黒門)(北門)「好文亭表門」

ア 園の西北 切り妻造りの腕木門 茅葺き屋根 木材には松を多く使用

イ 黒門 木部と板塀が松煙を塗り黒く仕上げていることから

ウ 一般の武士や庶民の出入り口

エ 開園時からの姿を保っている唯一の門(戦災を免れた)

(開園時の門は表門(北門)と南門の二ヶ所のみ 南門は移動・改築)

「南北御門・・・」(開園時の水戸藩お達し)

北門(表門) 旧岩間街道からの入り口

南門 千波湖につながる桜川船着場からの入り口

千波湖を舟で来られるのは? ()

○ 左右の桜とヤブツバキはいつから?

○ 狹義の園への出入り口としての門

天保13年から ~~表門~~ (北門、黒門) と ~~南門~~

明治23年 ~~御成門~~

昭和37年 ~~東門~~ (明治6年常磐神社創建後通路はあった)

平成19年 ~~西門~~ 歴史館下の蓮池に通じる

有料化に伴い、御成門の閉鎖、南門の普段閉鎖、

吐玉泉下に出入り口新設(普段は出口専用)

(3) 「陰の世界」から「陽の世界」へ 陰陽の調和の重視

表門から入り、一の木戸をくぐると、鬱蒼とした孟宗竹林、大杉森、隈籠の茂る幽遠閑寂な「陰の世界」につつまれる。心を静めて歩を進めると中門にいたる。中門をくぐり、右に進むと好文亭に向かう。3階の樂寿樓に上がると、眼前に「陽の世界」が広がる。中門に戻り、芝前門をくぐると広々とした梅林、見晴広場の散策もまた「陽の世界」の体感だ。

暗から明、陰から陽に変化する陰陽五行の思想にもとづいたものだ。これは、「偕楽園記」を貫く「陰と陽の調和」重視を体現する空間である。「偕楽園記」には、調和すべき陰と陽として、天と地、日と月、山と川、寒と暑、張と弛、馳と息をあげている。(⇒「偕楽園記」) 弘道館と偕楽園も陰と陽の関係にあり一対の教育施設である。~~屈と伸、私と公~~

(4) 一の木戸

門番がいて、身元や服装、男女別(入れる日が別)持ち物などの検査

(5) 孟宗竹林、大杉森、隈籠とした竹、杉、籠の茂る幽遠閑寂な「陰の世界」

ア 孟宗竹林 京都から移植された。間引きした竹は柵などに利用

イ 大杉林・森 杉には浄化作用がある 緑をもつて木の材料

ウ 限 笹 笹の葉のまわりに「ふちどり」があるので

抗菌作用があり、おにぎりの包み用によい

ちまきを包む粽 笹も広い意味では限 笹の仲間（植物学的には種が違う）

(6) 中門

好文亭への中門 進行方向に向かって表示（表門も一の木戸も）？をくわゆ たせ？
奥の表門

(7) 好文亭

・詩歌・管弦の催しなどをして家中の人々と偕に

心身の休養を図るために開園にあわせて創建

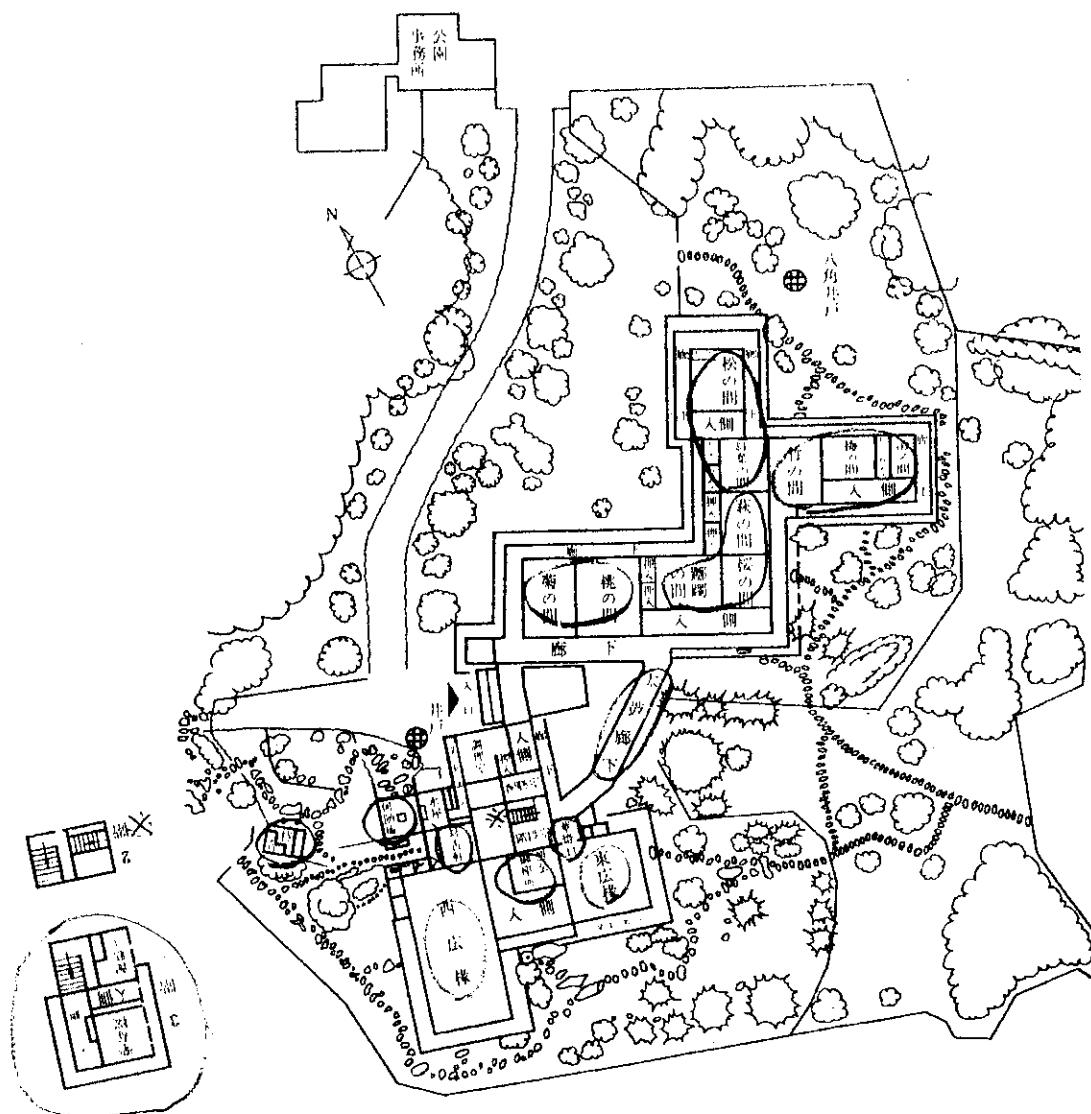
・「好文（木）」 梅の異名

「学問に親しめば梅が開き、学問を廃すれば
開かなかった」という中国の故事

・二層三階立ての好文亭本亭と北に繋がる平屋の
奥御殿からなる。全体を総称して好文亭。



好文亭平面図



○ 復元の歴史

昭和20年8月 空襲で全焼（好文亭全体、常磐神社も）表門は免れる

→ 昭和30年から3年かけて復元

昭和44年9月 落雷で奥御殿と橋廊下が焼失

襖絵は運び出せた（天袋の絵は消失）

→ 昭和47年2月復元

→ 令和4年 萩の間の天袋の絵の復元（再現模写）

平成23年3月 東日本大震災で大きな被害

→平成5年2月 復旧

ア 待合・何陋庵

・待合

茶席に招かれた客が、準備ができるまで待つところ

次の3つの齊昭書を彫ったものが壁に塗り込められている

「茶説」 茶に対する礼の重要性

「茶対」 茶道に対する教訓

「巧詐不如拙誠」 茶道における戒め

いずれも、齊昭の考えが滲んでいる

（人生観・世界観に通じる）

・何陋庵

簡素な草庵風の茶室 (九-14)

「何陋庵」の名は、論語の「君子居之何陋之有」による ⇒ 「何陋庵」(p)

床柱は、つつじの古木（鹿児島産）

イ 奥御殿

○ 柵町の中御殿に対して「奥御殿」

○ 奥御殿を設けた理由

城中の万が一（火災等）の際の立ち退き場所
城中の婦人たちの遊息の場所（当時藩内では管弦など禁制）

多くは藩主夫人とお付き婦人らが使用

本亭からは、華燈口から太鼓橋を渡り奥御殿に入る。

*（現在の見学順路は亭入り口から左に奥御殿菊の間から時計回り）

○ 10室からなる質素な平屋（茅葺き）。そのうち「竹の間」「梅の間」「清の間」の3室は、明治2年に増築したもの（柵町の中御殿の建材・ここは柿葺き）

○「菊の間」「桃の間」板敷き 庫裏として利用

○「つつじの間」「桜の間」「萩の間」藩主夫人お付きの婦人たちの詰め所

○「松の間」「紅葉の間」「松の間」は、藩主の座所、奥対面所。藩主が亭にお出でなく、夫人来亭の場合などは、夫人が使用。「紅葉の間」は控えの間

○「竹の間」「梅の間」「清の間」明治2年に増築した正室

「梅の間」は、最貴の室で、齊昭夫人（貞芳院文明夫人）が明治2年から6年まで「梅の間」を中心に住まわれた。明治天皇の皇后、皇太子時代の大正天皇、皇太子時代の昭和天皇もここで御休息になられた。

○ 奥御殿の襖絵 ⇒ (7) 好文亭 復元の歴史 参照 (P 3)

○創建当初 萩谷巣喬を中心とした襖絵や杉戸の絵が描かれていた。ほとんどが水墨画

○昭和30年代からの奥御殿の襖絵は2期にわたり制作された。43年度完了

第1期 須田珙中（すだきようちゅう）

萩の間 梅の間 紅葉の間 松の間を完成 竹の間制作中に病

第2期 田中青坪（たなかせいひょう） 珙中没後、後を継ぐ

竹の間 菊の間 桃の間 桜の間 つつじの間 入側の間（南天）

* 今回（令和4年9月から公開）



萩の間の天袋の絵 再現模写・寄贈

萩の間襖絵は、好文亭復元（昭和30～33）にあわせ、須田珙中が描いたが、落雷火災で天袋は運び出すことはできなかった。後に、田中青坪によって太陽と雀の図柄で補われた。今回、珙中構図で再現模写された。

（茨城出身の画家・谷津有紀氏が描き、水戸の泰清堂が仕立てた）

△ 太鼓橋廊下

奥御殿と好文亭本亭を結ぶ太鼓型の橋廊下

外からは窓と判らないよう工夫した築で作った格子窓（斎昭創案）

<好文亭本亭へ>

△ 華燈口

奥御殿から茶室に渡る出入り口（2畳の部屋）。小坊主が控えていて連絡にあつた。

杉戸には、古今集の和歌が華麗な色紙短冊に

ウ 東塗縁

- ・18畳の板張り（漆塗り）。80歳以上の家臣、90歳以上の庶民の老人を招き慰労したり、家臣とともに作歌 作詩など楽しんだ。

エ 御座の間

- ・6畳の質素な藩主の間（特に床の間を設けず、簡素に竹の柱だけ）。
- ・12畳の入側を隔てた縁長押には斎昭自筆の「好文亭」の扁額。
- ・紗張り戸で左右が透かして見える工夫

オ 西塗縁

- ・18畳の板張り（漆塗り）。文墨雅人が集まり、詩歌、書画を楽しんだ。
- ・北側と西側各2枚の杉戸 作詞、作歌に便利なように、四声別韻字、真仮名平仮名の一覧
- ・天上は、杉皮網代張り 天井は竹籠目紗張り

カ 対古軒

- ・西塗園の北に面した4畳半。好文亭に招かれた人が少し休んだり、茶席に出る前に、静座して心気を整えるなどに使われた部屋
- ・「世をすべて 山に入る人 山にても なお憂きときは ここに来てまし」という斎昭作の歌を円形の板額に彫ってある。「世をすべて 山に入る人 山にても なお憂きときは いづち行くらん」の古歌に対して、ここ好文亭にお出でくださいと詠んだ。
- ・板額中央の対古軒の文字は篆書

キ 楽寿楼

- ・3階部分を楽寿楼という
- ・南に面した八畳が正室
床柱の孟宗竹は、島津斉彬から贈られた
(現在のものは、鹿児島市長から)
- ・西側の富士見窓は陣太鼓の余材を利用
- ・東西南の勾欄からの遠近山河の景は、
まさに「洵に知仁一趣の樂郊」⇒「偕楽園記」(p)
論語 「知者は水を楽しみ 仁者は山を楽しむ
知者は動き 仁者は静かなり
知者は楽しみ 仁者は寿し」 ⇒「偕楽園と論語」(p)
- ・雨戸の工夫(1楷も同じ) ・三連障子 ・配膳用昇降機



(8) 芝前門

中門先の広場から梅林・見晴らし広場に出る門 なぜ表示が梅林側？

(9) 偕楽園記碑

- ・斎昭の宇宙観、世界観、人間観に基づいた園の由来や造園の趣旨が記されている
- ・伊豆石と呼ばれる安山岩の平石
- ・斎昭の書を刻んだこの碑は早い時期にできていたが、学校ができた上での偕楽園ということで、

「弘道館記」の年号の次の年の年号にしてある。(開館、開園も1年ずらし)

「弘道館記」 天保九年歳次戊戌春三月齊昭撰文并書及篆額 仮開館十二年八月
(權中納言從三位源朝臣齊昭)

向き 震(東) 鹿島神社は北(坎)向き 要石は西(兌)向き

「偕楽園記」 天保十年歳次己亥夏五月建景山撰并書及題額 開園十三年七月
向き 艮(北東) 絵・花谷葉香

(10) 見晴広場・仙奕台

ア 見晴広場

イ 仙奕台 楽寿楼からの眺望と並んでこの仙奕台からの眺めも「知仁一趣」

・湖上から吹き上げる涼風を受け、遮る人工物のない180年前を瞼の裏に浮かべたい

・偕楽園記「西筑峯を望み、南仙湖を臨む・・」参照 ⇒「偕楽園記」(p)

「奕」は囲碁の意 石でできた碁盤、将棋盤、琴石は当時からのもの

石は、有事に砲台に使用との説あり

・ここに見事な「天翔の松」「羽衣の松」があったが、残念ながら松食い虫で昭和53、54年に伐採された

ウ 左近の桜

齊昭夫人が京都から嫁ぐ時、仁孝天皇より御所紫宸殿前の「左近の桜」の苗木をいただいた。

弘道館開館にあたり、弘道館に移植された。その後枯れてしまい、昭和38年宮内庁より3本もらい受けた。ここにも植えられ大木に育ったが、令和元年の台風で倒れてしまった。

(11) 南崖(偃湖暮雪・子規の句碑)

ア 僾湖暮雪 「暮」を古典文字の「莫」を使用 齊昭書

水戸八景の一つ(青柳夜雨を1番目とすると最後の8番目)

イ 子規の句碑

・「崖急に 梅ことごとく 斜めなり」 写生句ではあるが、人生にも通じるか

・正岡子規が明治22年4月5日に偕楽園を訪れた際の印象を後年に詠む

大学(現東京大学)の学友 菊池謙二郎を訪問(すれ違い)

「余は未だ此の如き艶麗幽遠なる公園をみたることあらず」(樂寿楼で)

・昭和28年春分の日 水戸の俳人たちによって常磐神社境内に建碑・昭和36年南崖に移転

(12) 南門(普段は閉門中) ~

ア 千波湖につながる桜川の船着場からの入り口

千波湖を舟で来られるのは? ()

○ 由緒ある南門の説明板もなく閉門されているのは悲しい

・水戸線(常磐線)、桜川の付けかえ等々で、粗末に扱われ、園有料化に伴い閉門。せめて、出口専用として通行できるようにしたい。

イ 観梅碑、七曲り坂登り口

・観梅碑 永坂周が、梅の季節の偕楽園を詠んだ漢詩

・七曲り坂を登り切ったところに「何陋庵」への入り口 さらに表門から中門への道に合流
その辺から見る好文亭の雨戸の開閉は隠れた貴重なシーン(角での転換)

(13) 吐玉泉

ア もともと湧水の多かったところ、地形の高低差を生かして集水

イ 井筒は太田真弓山の大理石(寒水石) 現在の井筒は4代目(昭和61年~)

白色も景観を考慮(暗のなかの白) 大杉に囲まれた暗(黒)のなかの白(明)

*「弘道館記碑」「向岡記碑」も寒水石、齊昭書

向岡記の碑文中に「夜余秘」→「向ヶ岡弥生町」→「弥生式土器」

ウ 好文亭の茶室「何陋庵」の茶の湯に使用・・七曲り坂経由

七曲り坂を登り切ったところに「何陋庵」への入り口あり

エ 西の桜山麓の「玉龍線」と一対か

～吐玉泉下出口(普段は出口専用) *有料化で料金所を作り、出入り口の扉をつけた

偕楽園記（読み下し文）

天に日月有り、地上に山川有り、万物を曲成して造れます。萬物草木、各々その性命を保つものは、一陰一陽その道を成し、一寒一暑その宜しきを得るを以てなり。これを弓馬に比う。弓に一張一弛育りて目に動く、馬に一馳一息育りて目に健し。これに一弛なれば、則ち必ず機み、馬に一息なれば、則ち必ず死る。これ自然の勢なり。

それは万物の體にして、その或は君子となり、或は小人となる所のものは何ぞや。その心の存するところに在るのみ。語に曰く、(性相近く習相遠し)と。善に習えば則ち君子となり、不善に習えば則ち小人となる。今、善なるものをしてこれを言へば、四端を扩充して以てその徳を修め、六義に遊んで以てその業を勤む。これその體、則ち相遷きものなり。

然り而して、その氣稟、或は音しきといふ能わす。是を以て、屈伸懶急、相俟ちて、その性命を全うするものは、夫の万物と何を以て異ならんや。故に心を存して體を修め、その万物と異なるものを盡うは、その性に率う所にして、形を安んじ魂を怡ましむ。その万物と同じものを盡うは、その命を保つ所なり。

一者皆その體に中れば、喜く盡つし語うべし。故に曰く。苟もその體を得ば、物として長せざるはなく、苟もその體を失すれば、物として消せざるはなし。これまた、自然の勢なり。然らば則ち、人もまた地獄ながるべからずかのや固もなり。嗚呼、吾方の書定に引かれて孟軻の遺訓を術せる、甘利に上故あるなり。

果してこの道に由れば、則ち、その弛息して形を安んじ魂を怡ましむ所なり。將書にいすれの傍にして可ならんや。苟す、その業體に當るし、且々に施設するものは、文を學ぶの余なり。鷹を田野に放ち、獸を山谷に置くものは、武を講ずるの跡なり。

尺寸千里、聲を擴め、白巻盡み、四面一の如し。
而して山は以て動體を發育し、川は以て飛潛を剛壌す。洞に仁一趣の樂郊と謂うべきなり。是に於いて、萬物千殊を以て、以て萬象の地を奏す。また二亭を作り、好文といひ、一亭じ曰う。ただに以て他日授懸の所に供するのみに非す。蓋しました、國中の人をして、萬物を盡するといひあらしめんと欲す。

國中の人、苟も、吾が心を体し、夙夜懃らず、既に能くその體を修め、また能くその業を勤め、時に余暇有るや、乃ち、親朋相携え、朋友相伴ひ、悠然として二亭の間に逍遙し、或は詩歌を唱酬し、或は管絃を弄撫し、或は紙を展べて筆を揮い、或は石に坐して茶を点じ、或は蘭蕙を花前に傾け、或は竹竿を湖上に投す。唯、意の遷する所にてらて並置せば、乃ちその宜しきを得ん。

これ余が兼て樂しみを同じくするの趣なり。因りて、これに命じて偕楽園と曰う。

天保十年歲次己亥夏五月重つ
景山御井に墨及び額に題す

廿二年十一月

(1842)
(1902)
(1962)
(2022)

講演会に参加して

子どもにお酒を飲ませない～100年前にそれを法律にした日本人～

共催：日本キリスト教婦人矯風会・日本禁酒同盟

後援：根本正顕彰会

日時：2022年11月16日 矯風会館1階（東京都新宿区百人町）

顕彰会からの出席者（3名）

会長 山田正巳 副会長 根本正治 元副会長 高畠精一

講演会を傾聴して私が思いめぐらした事柄を記してみたいと思います。

一つは多感である青年期に体験した水戸藩での内乱（天狗諸政の乱）が根本正のその後の人生を大きく転換する原点だったと思います。天狗党の処刑では200名が加賀で処刑され、首謀者4名の首が水戸に送られ、市中を引き回されています。刑を執行されないまま大政奉還を迎えた天狗党の生き残りの面々230名は諸生党への復讐を胸に江戸小石川の水戸藩邸に帰っていました。また、諸生党は会津藩に合流、官軍と戦って敗れ散り散りとなって各地に潜んでいましたが、それらを武田耕雲斎の孫、金次郎は探し出し殆ど殺したと言われています。このように毎日のような藩内での内ゲバで明治維新の原動力となりながら、新政府で活躍すべき多くの人材を失っている。このような狭い地方で仲間同士が殺し合いをしていたら魁としての日本国を導いてきた水戸藩は消滅してしまう。義公や烈公の教えと違う方向に歩んで、このままではいけないという焦りの日々だったのでないでしょうか。その時ちょうどフランスから徳川慶喜の実弟である昭武が帰朝し、それに随行した攘夷派水戸藩志の奉行、服部潤次郎から時計とマッチを見せられたのをきっかけに外国行きを決心したと思われます。

政治家となった根本正は、よく「ガン（武器）とボットル（酒瓶）をなくさなければならぬ」と言っていたと言われておりますが、天狗諸生の乱（ガン）の戦果は何一つなく、ただ怨念だけが残っただけであります。暴力や戦いでは物事は解決しない、ルールに則った徹底した話し合い（未成年者飲酒禁止法の成立に21年かかる）が真の解決方法であることを米国で学んだと思います。また、ボットル（酒瓶）は、現在はヘロインや覚せい剤等に代わって若者を中心と体を蝕んでいます。また、合法的に鎮痛剤・ベンゾ系抗不安薬が医療の中で増えてきているとの加藤先生のお話でした。

このように根本正の生き様は過去のものではなく、現在においても燐然と輝き私たちの道標となっております。

（山田 記）

根本正顕彰会では、ホームページやYouTubeで活動内容を世界へ発信

◆ホームページ

平成10年5月1日発行の会報第1号から令和4年3月17日発行の会報第99号まで全て公開しています。



1851 (嘉永4年) ~ 1933 (昭和8年)

· 楊家將傳奇在五華 · 第二章 · 135 ·

（三）在本行的每一个营业部，都设有“客户意见簿”，客户对本行的批评和建议，由各营业部负责人负责处理。

各学年、選手権参戦生徒の成績による実績上場額を算出した結果、最も実績がある選手としてアメニティ賞が贈呈され、その選手は各学年で最も成績を残す者であることを示すものである。



編集後記

暑い暑い夏が過ぎもう冬の到来、年末を迎えます。

会員の皆様いかがお過ごしでしょうか。

皆様のご協力に感謝しつつ会報100号をお届けいたします。

今年度はコロナ禍がウィズ・コロナに代わり、予定された行事を実行することができました。

8月の五台地区での根本正顕彰フェスティバルは、根本正を輩出した地元での開催ということで会員の皆様や地区の皆様の一丸となったご協力のもと無事行うことができました。

「植桜の記」碑・「永念巡回の碑」など五台地区にまつわる大正・昭和初期の歴史に触れました。

9月の根本正ゆかりの地を訪ねる旅（偕楽園）は人数制限や短時間での実施などのコロナ対策をしながら実行しました。偕楽園はいつでも行ける場所ですが、改めて杉や竹林の陰の世界を味わいながら散策し、好文亭から千波湖の開けた陽の世界を臨み、「偕楽園記」碑前で音読による斎昭の開園理念に思いを馳せました。

11月の公民館祭りは直接参加ではなく、中央公民館2階展示ルームへ10月初旬から11月末まで「根本正フェスティバル報告」「根本正と明治維新」「根本徳子」「東木倉村絵図」の展示という形で間接的参加としました。

「年年歳歳花相似年年歳歳人不同」といいますが、近年は自然も社会も人も次々に変わり、時代の変化についていくのが難しいと思う様になってきました。温暖化による気候変動、社会システムのテクノロジー化、日本の経済や人口減等の国力の弱体化に加え国際情勢の不安定化など問題山積です。私たちにできることは何か。

人類は人と人が繋がり大きな力を作り、社会を進化させてきました。

人と人、組織と組織、地域と地域、国と国、同じ意見でなくともコミュニケーションを取り続けてお互いを尊重することが大事なことだと思うこのごろです。

皆様ご自愛のうえよいお年をお迎えくださいませ。

横地富子記